

# 重力レンズ宇宙論（講義資料）

大栗 真宗

千葉大学 先進科学センター



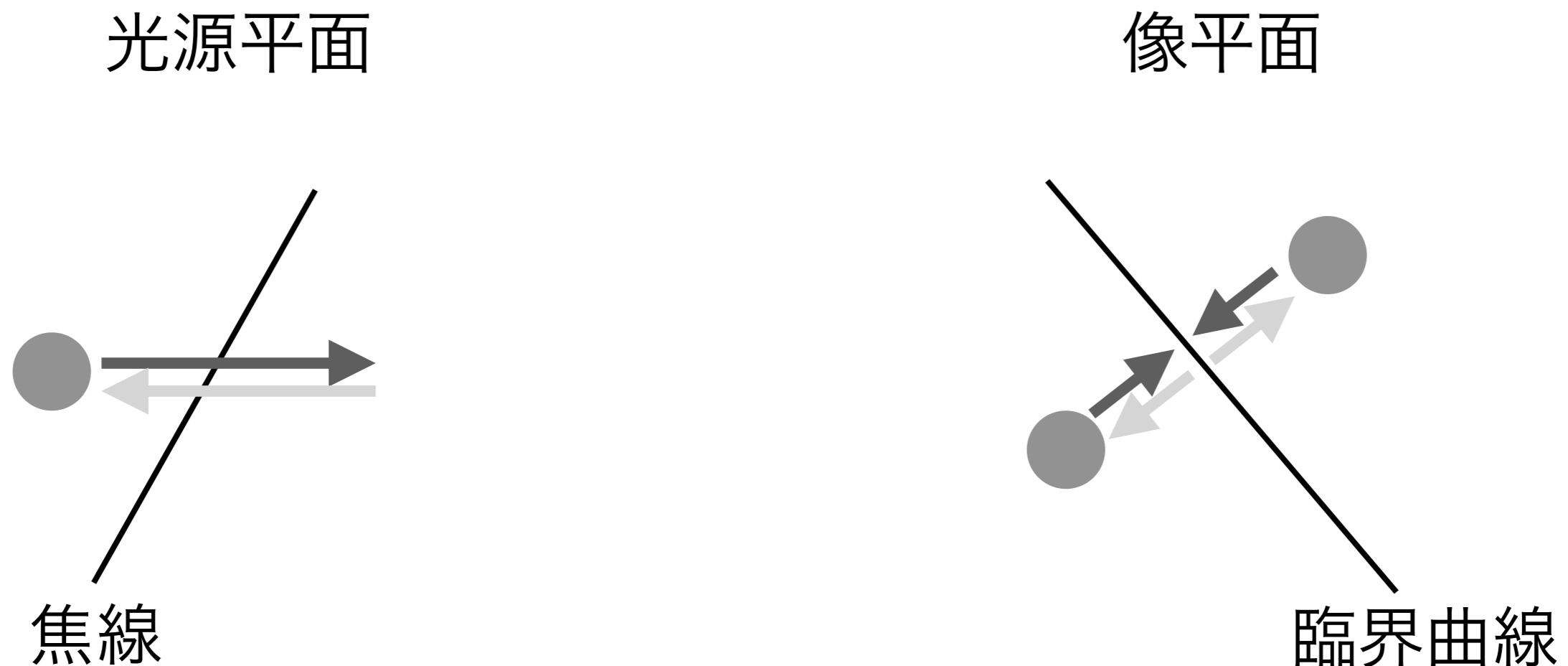
CHIBA  
UNIVERSITY



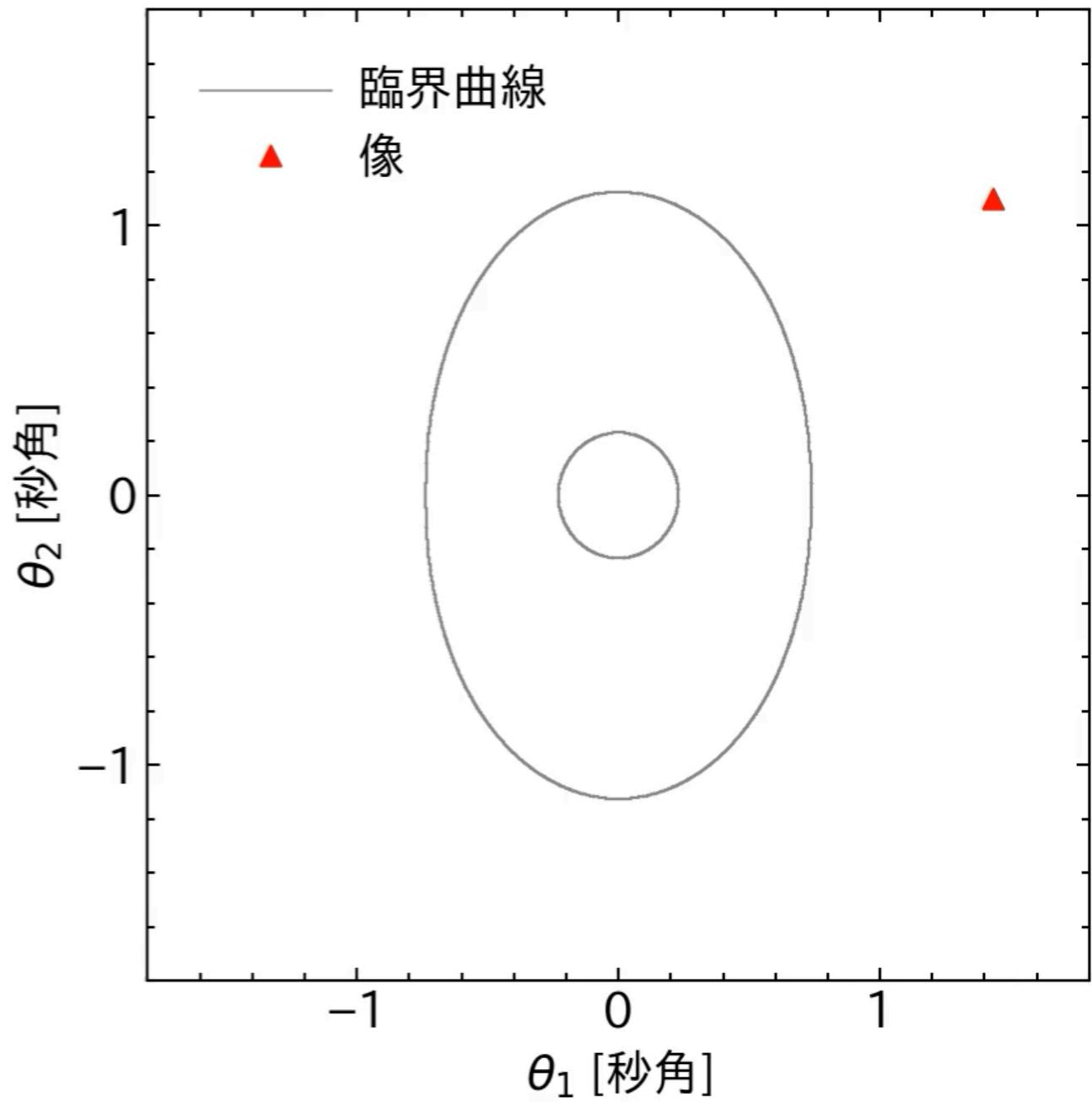
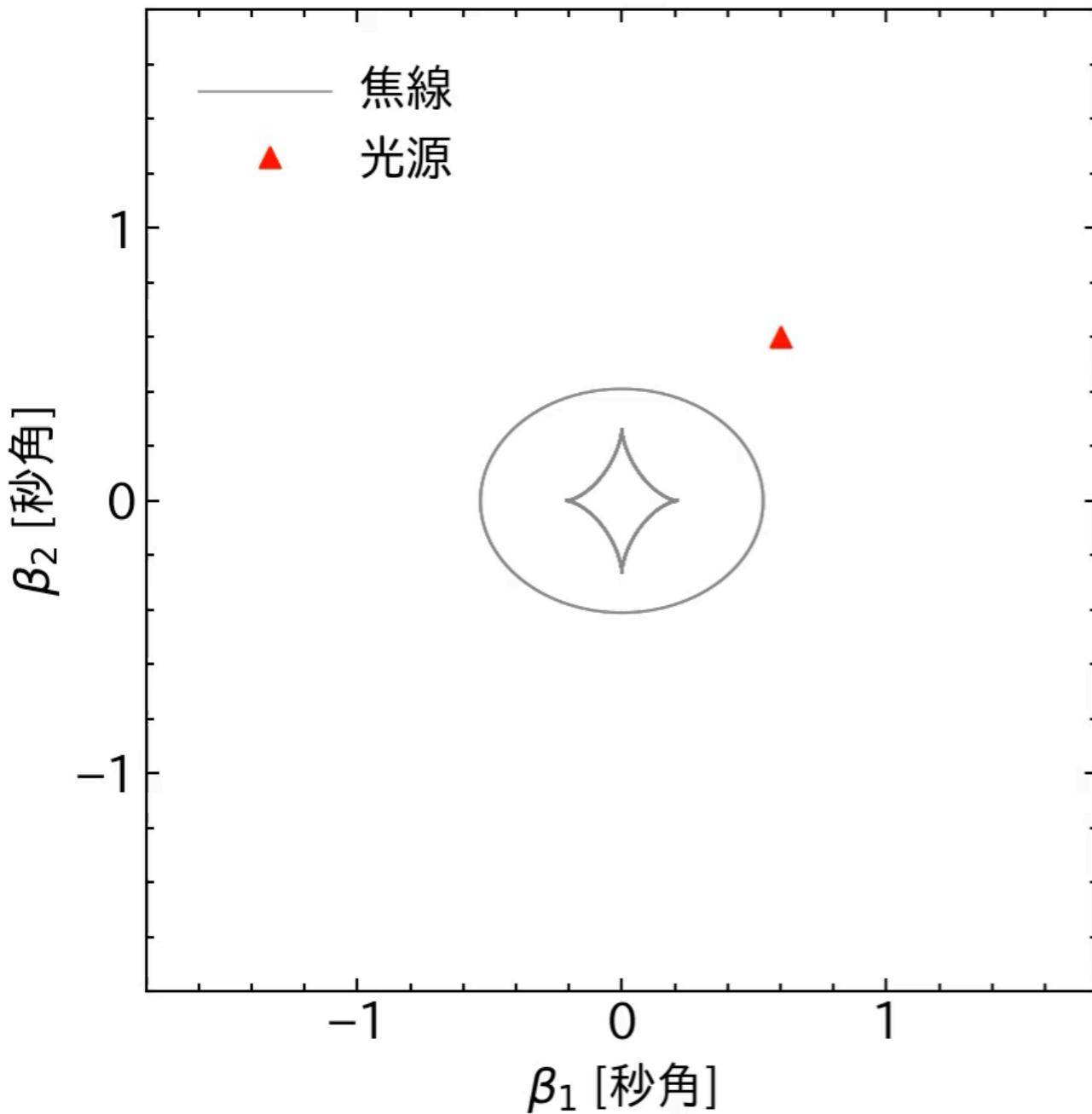
Center for  
Frontier  
Science

2024/5/30-6/4 集中講義@立教大学

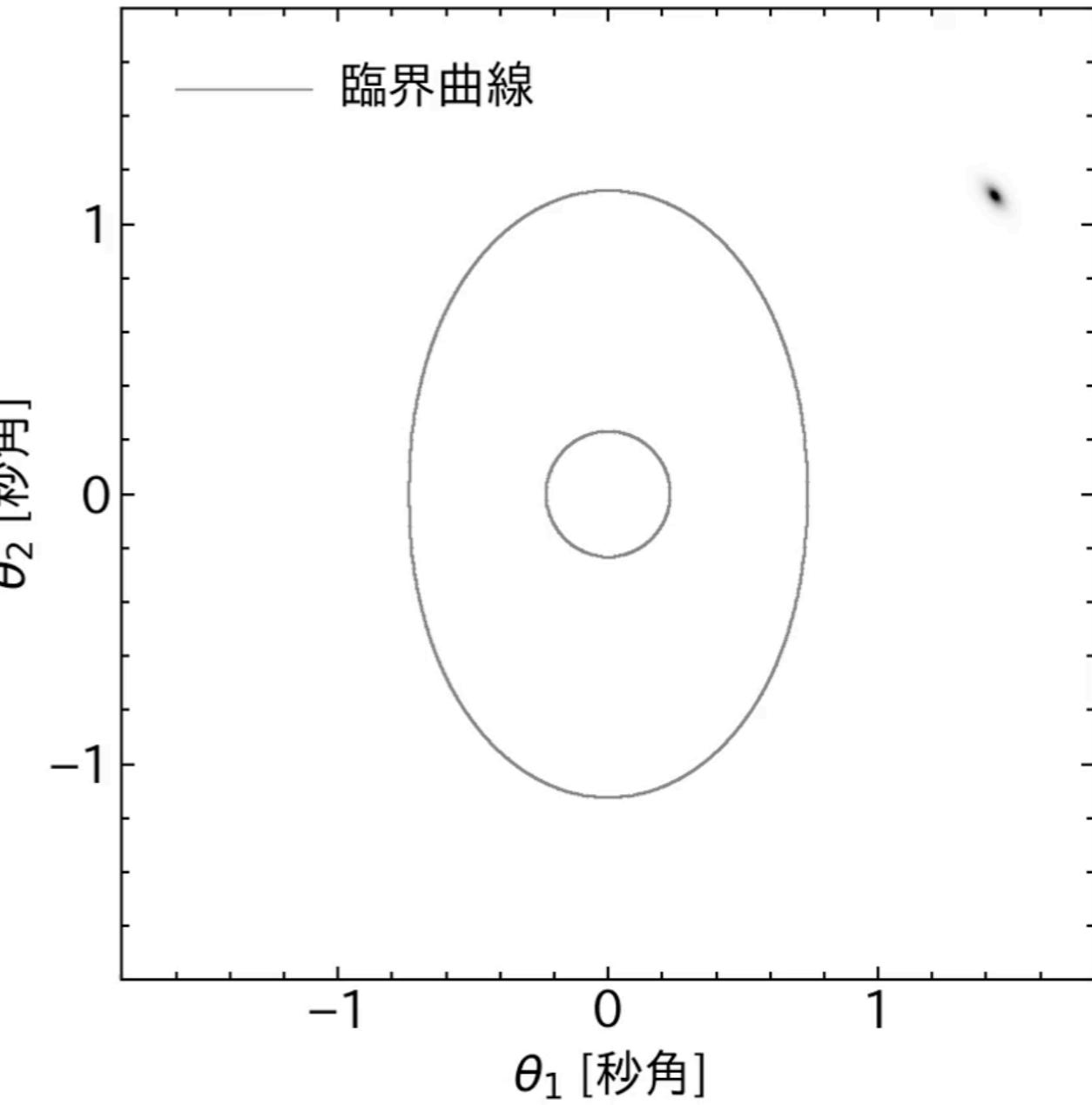
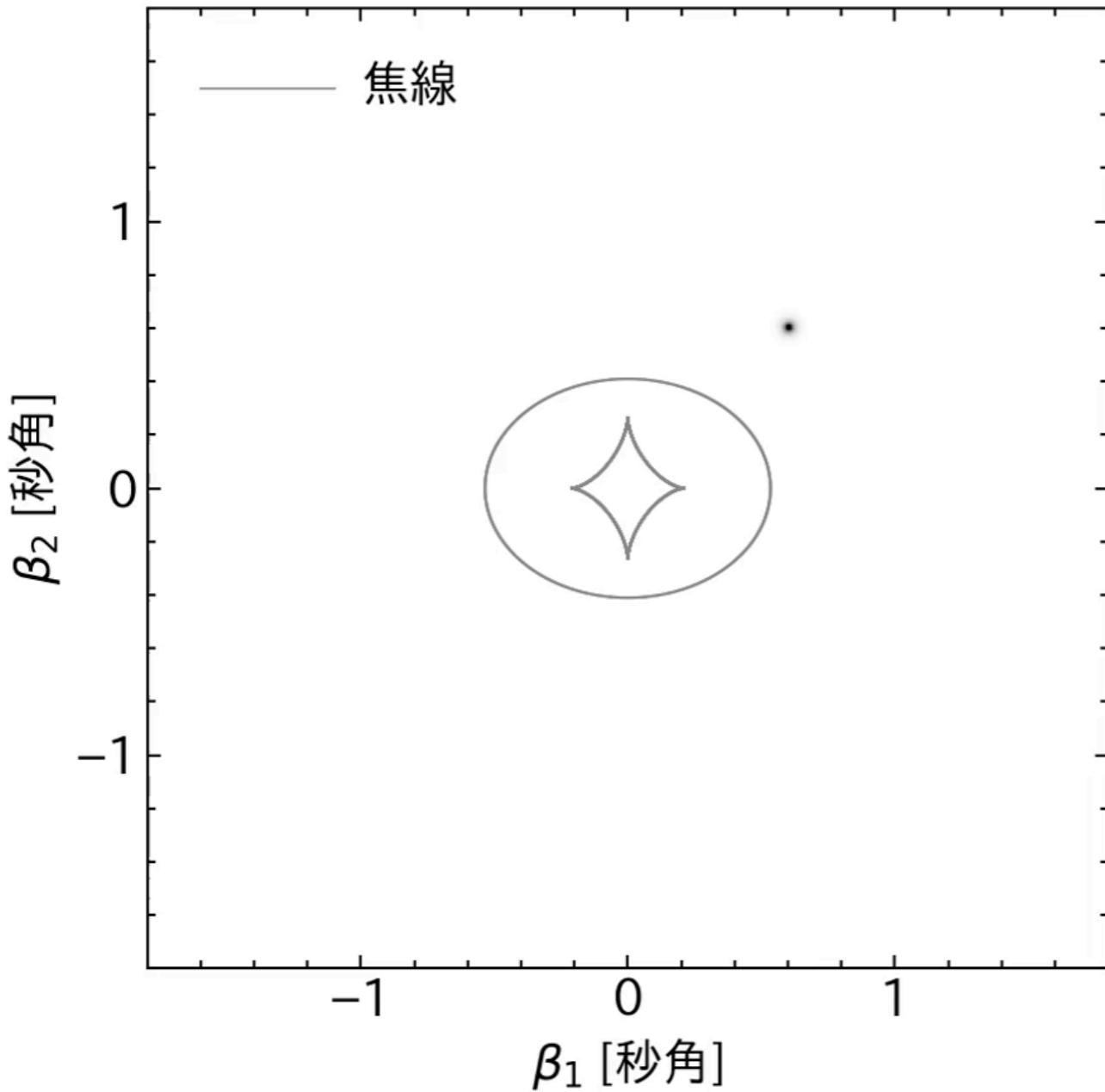
# 臨界曲線と焦線付近の複数像



# 強い重力レンズアニメ (点状光源)



# 強い重力レンズアニメ (広がった光源)



# 重力レンズ解析の数値的手法

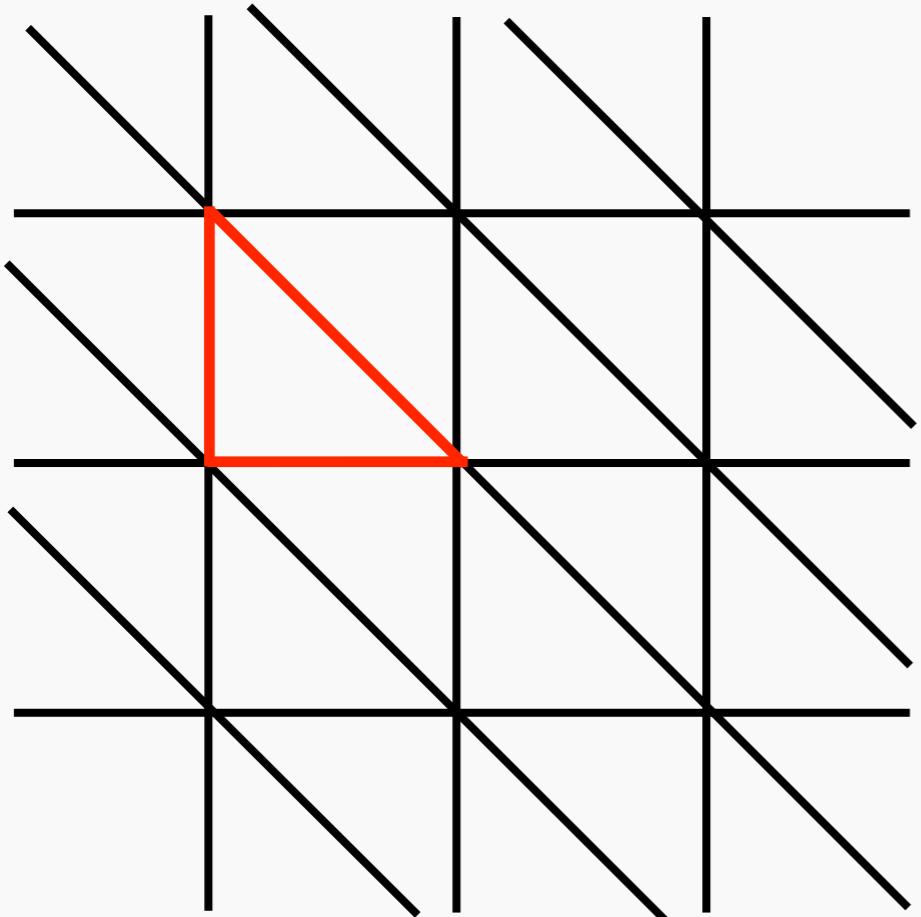
- 一般に重力レンズ方程式を解析的に解くのは困難

$$\vec{\beta} = \vec{\theta} - \vec{\alpha}(\vec{\theta})$$

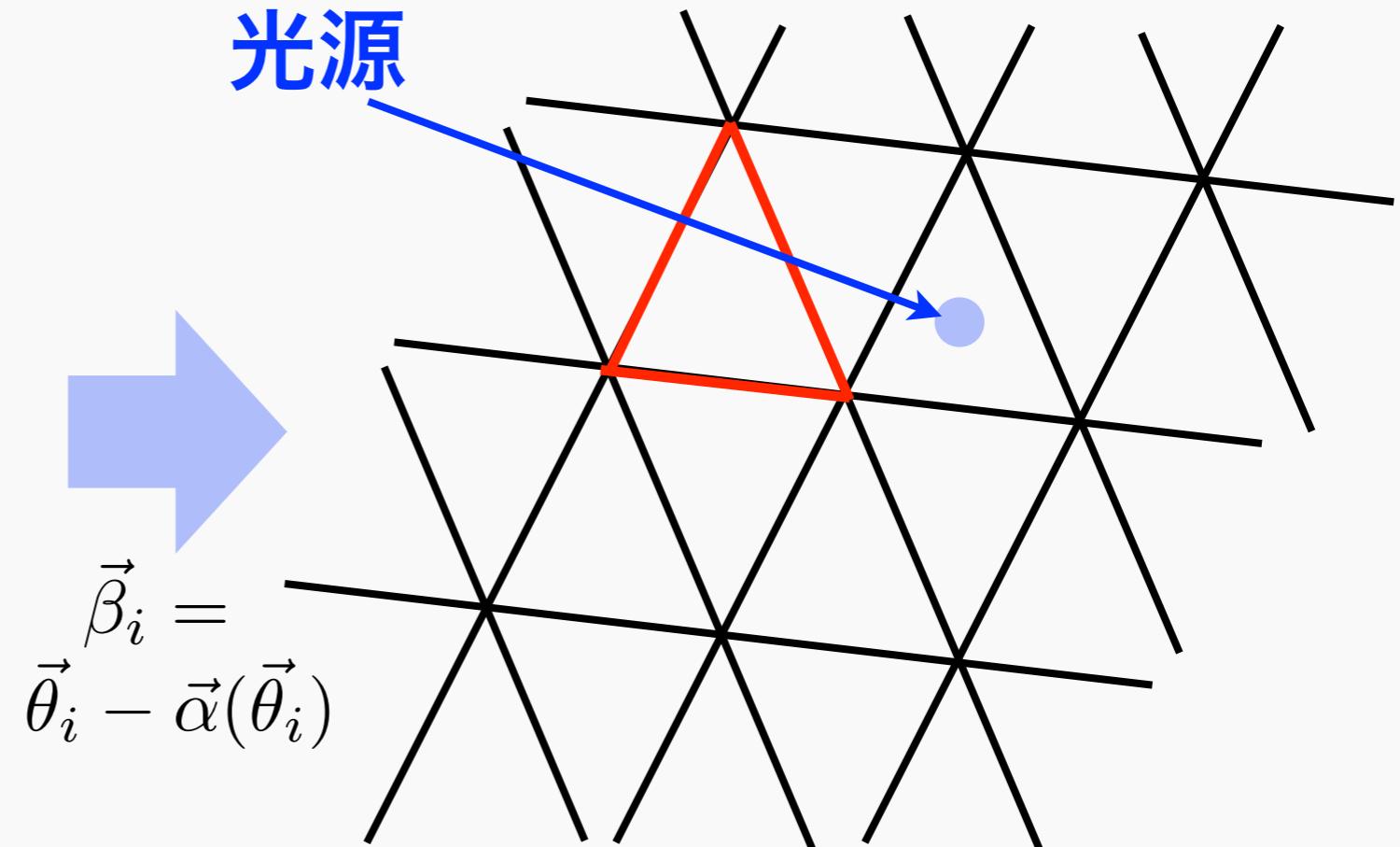
( $\vec{\beta} \rightarrow \vec{\theta}$  は非線形、複数の解が許される)

- 数値的に重力レンズ方程式を解くことが必要

# 数值的な解の探索



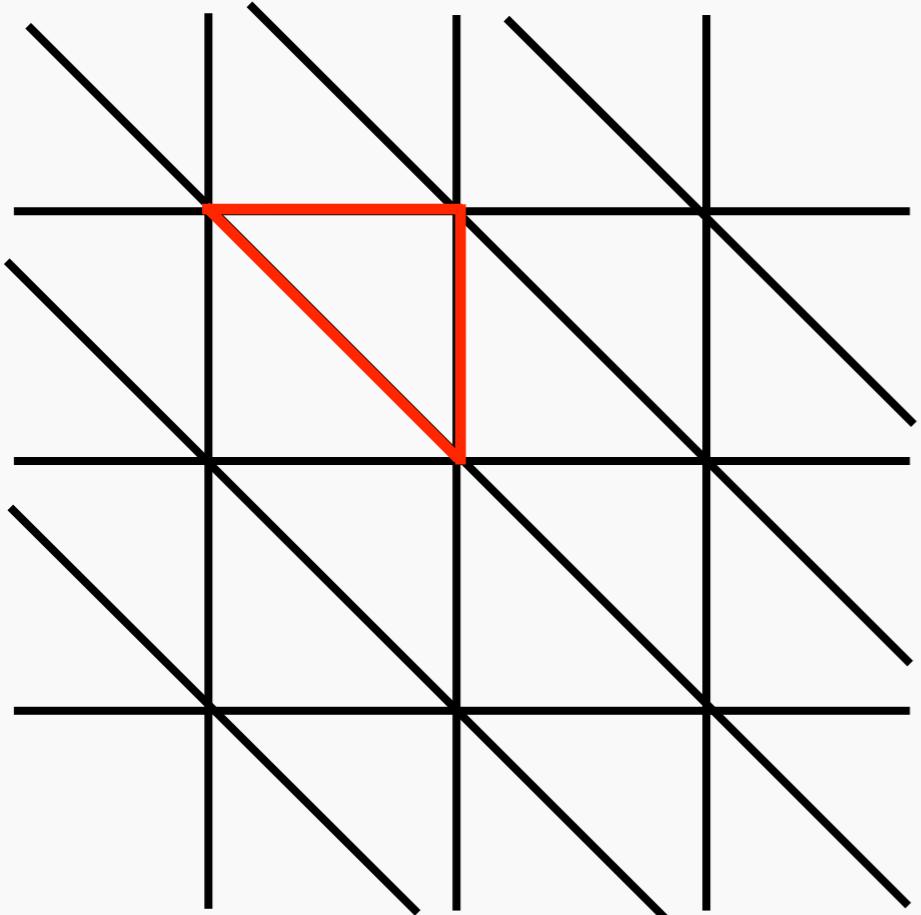
像平面 ( $\vec{\theta}_i$ )



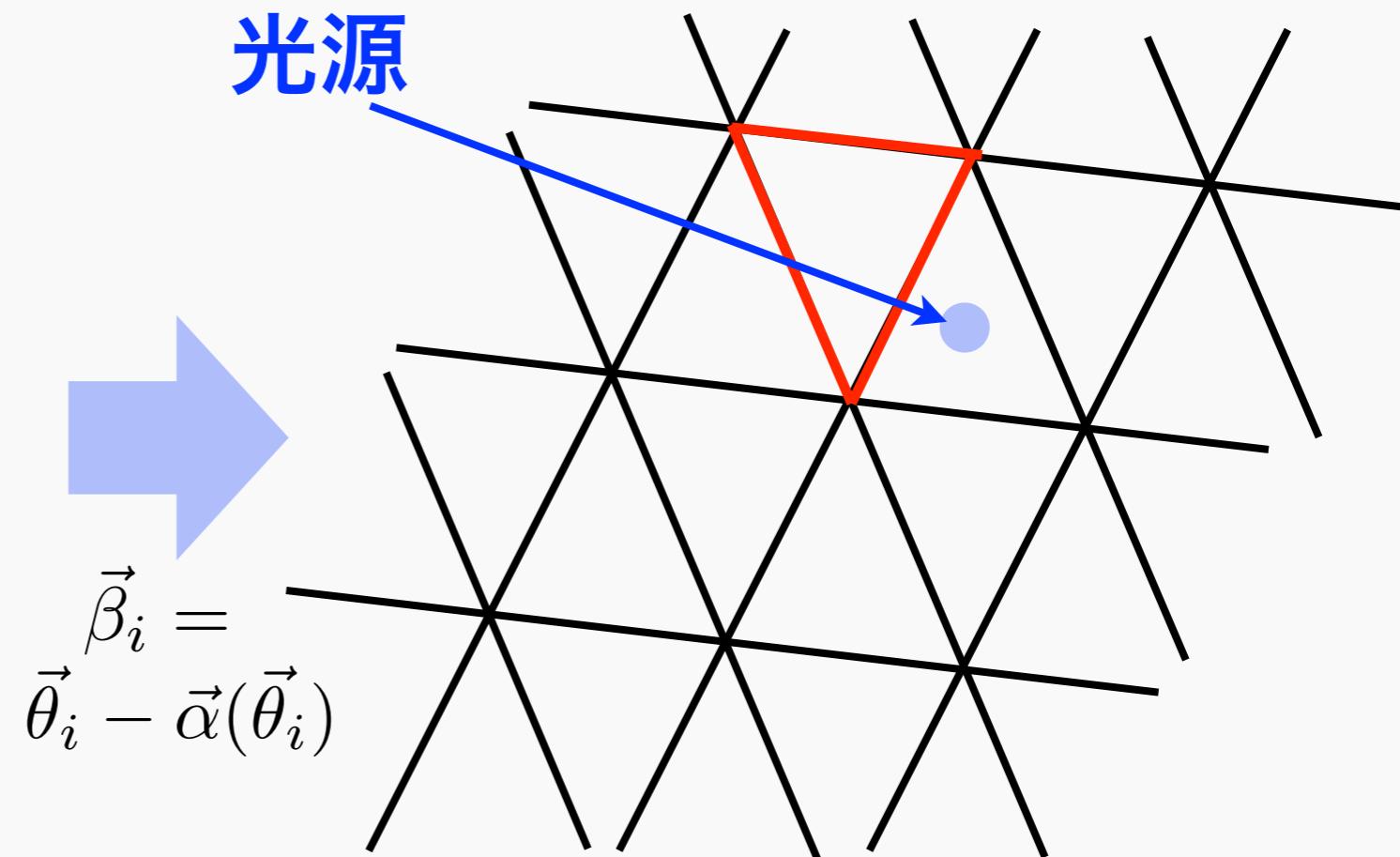
光源平面 ( $\vec{\beta}_i$ )

$$\vec{\beta}_i = \vec{\theta}_i - \vec{\alpha}(\vec{\theta}_i)$$

# 数值的な解の探索



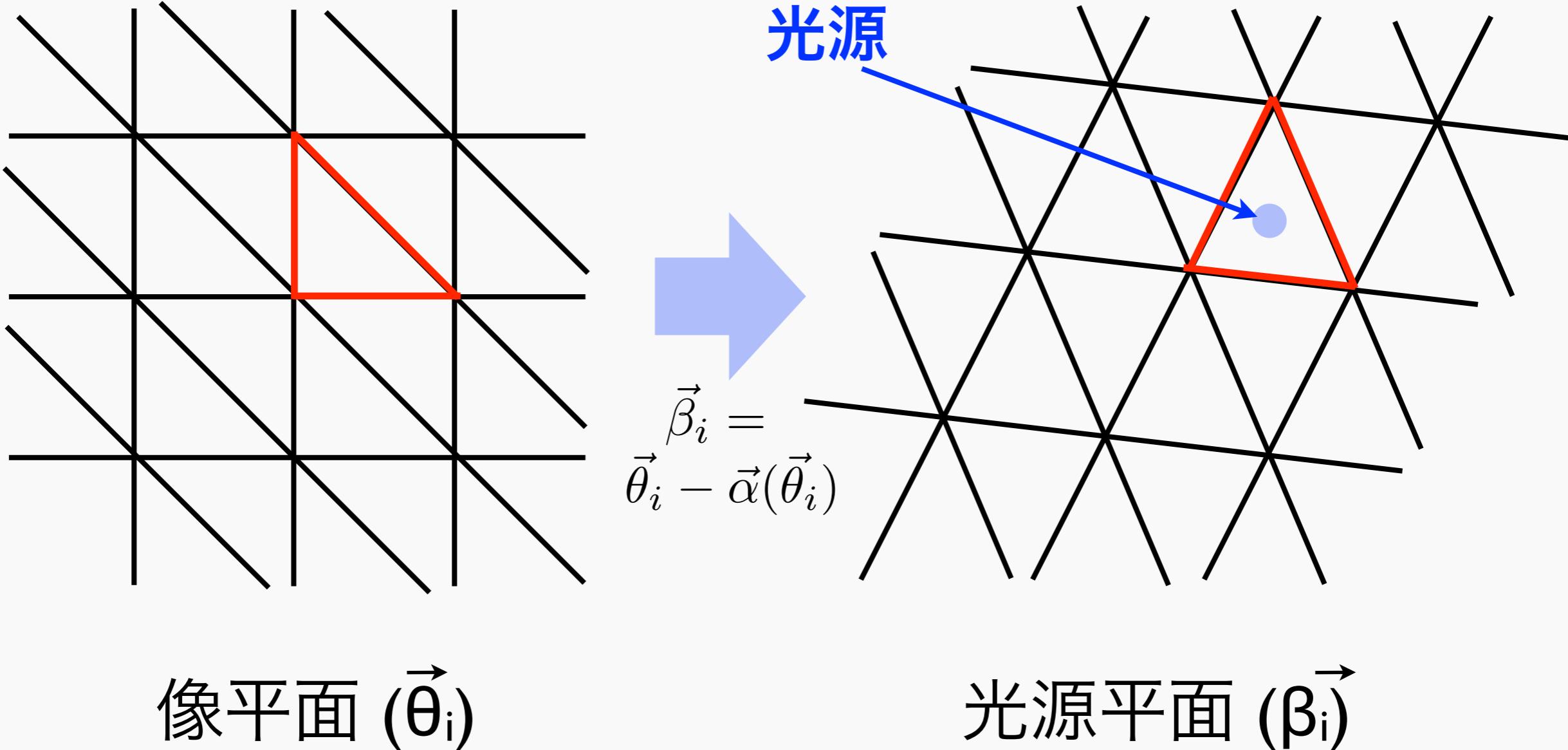
像平面 ( $\vec{\theta}_i$ )



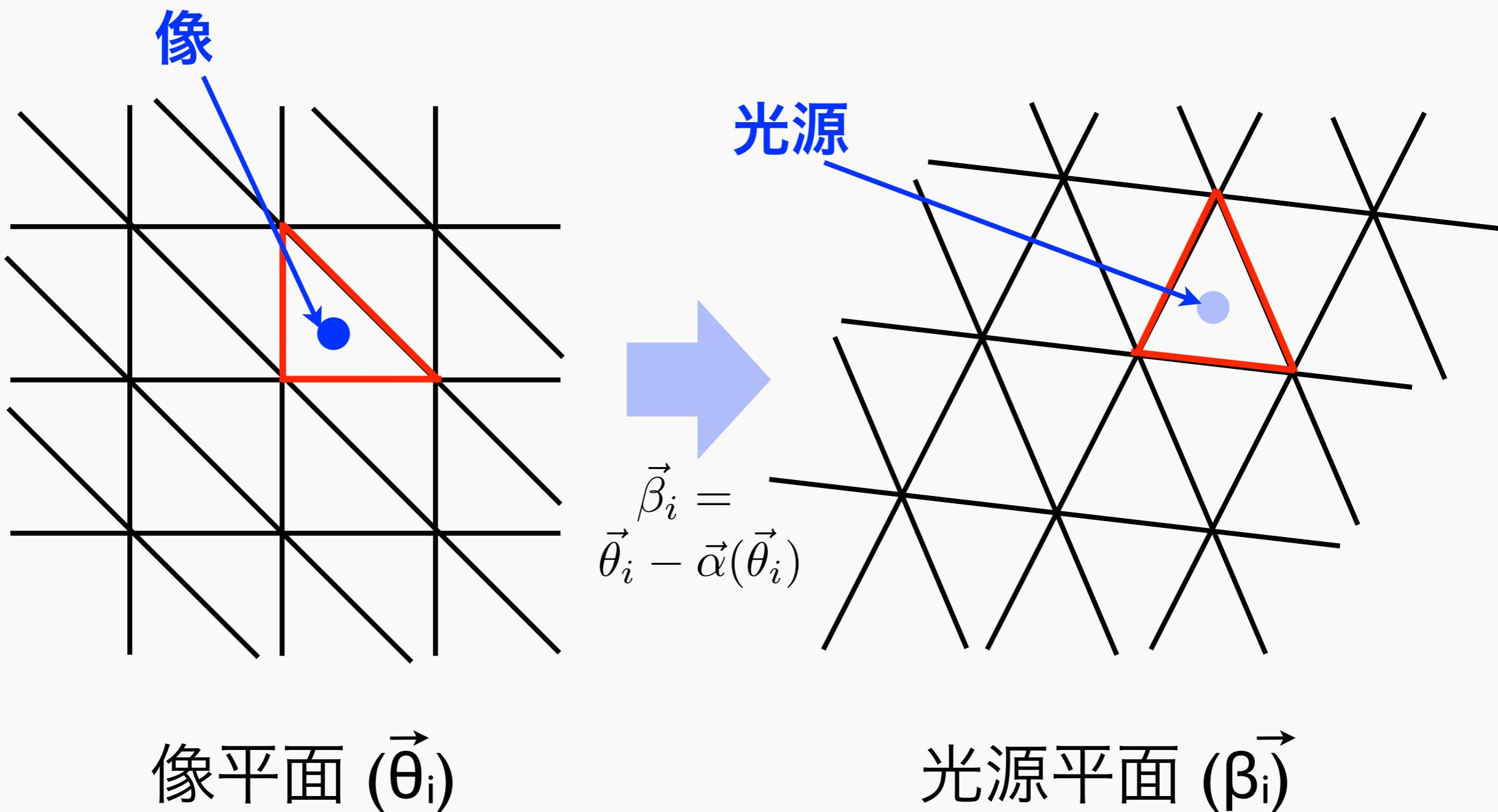
$$\vec{\beta}_i = \vec{\theta}_i - \vec{\alpha}(\vec{\theta}_i)$$

光源平面 ( $\vec{\beta}_i$ )

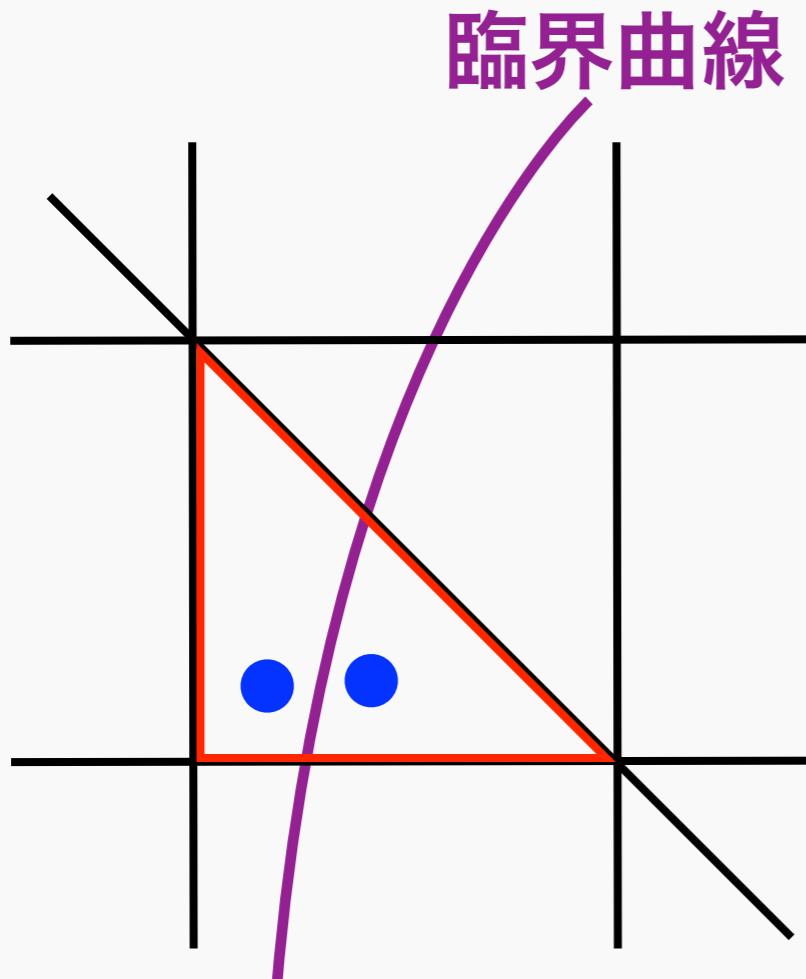
# 数值的な解の探索



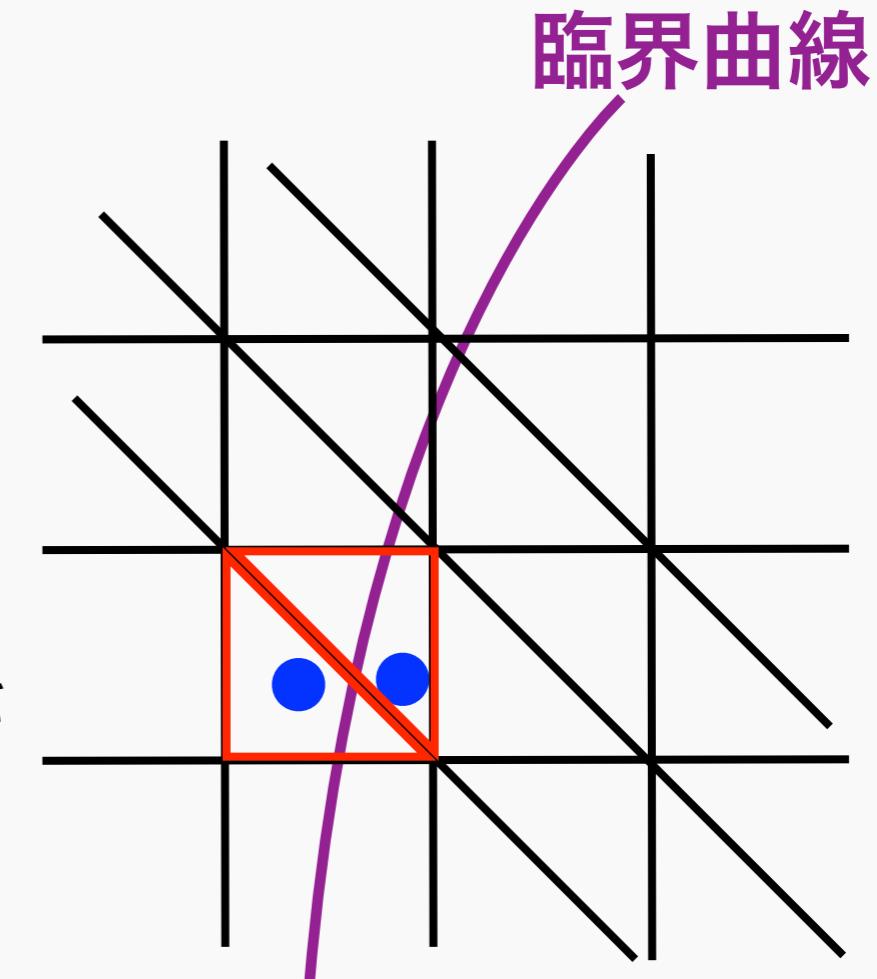
# 数值的な解の探索



# 数値的な解の探索



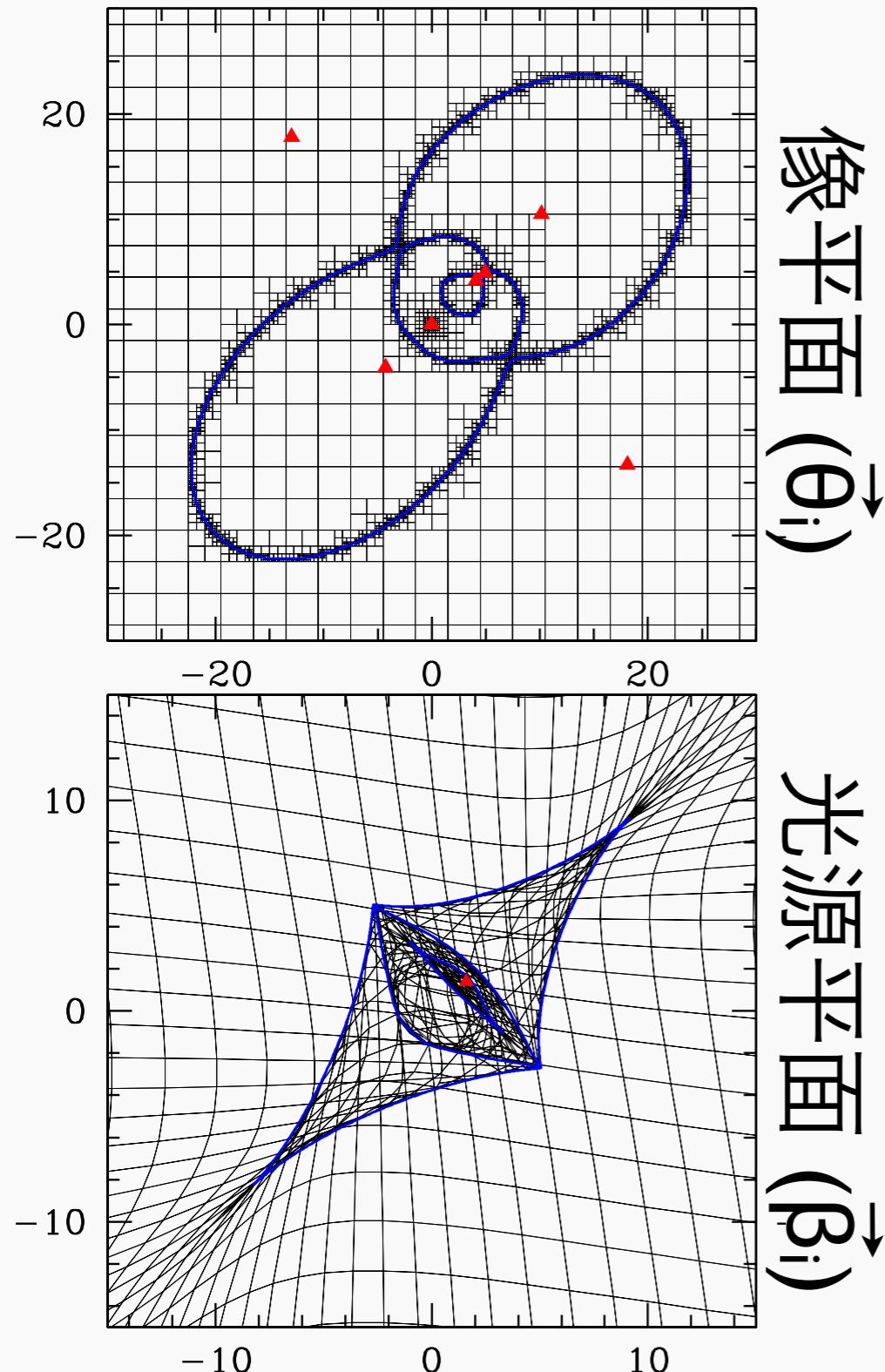
グリッドを  
細かく



像平面 ( $\vec{\theta}_i$ )  
複数像を分解  
できていない

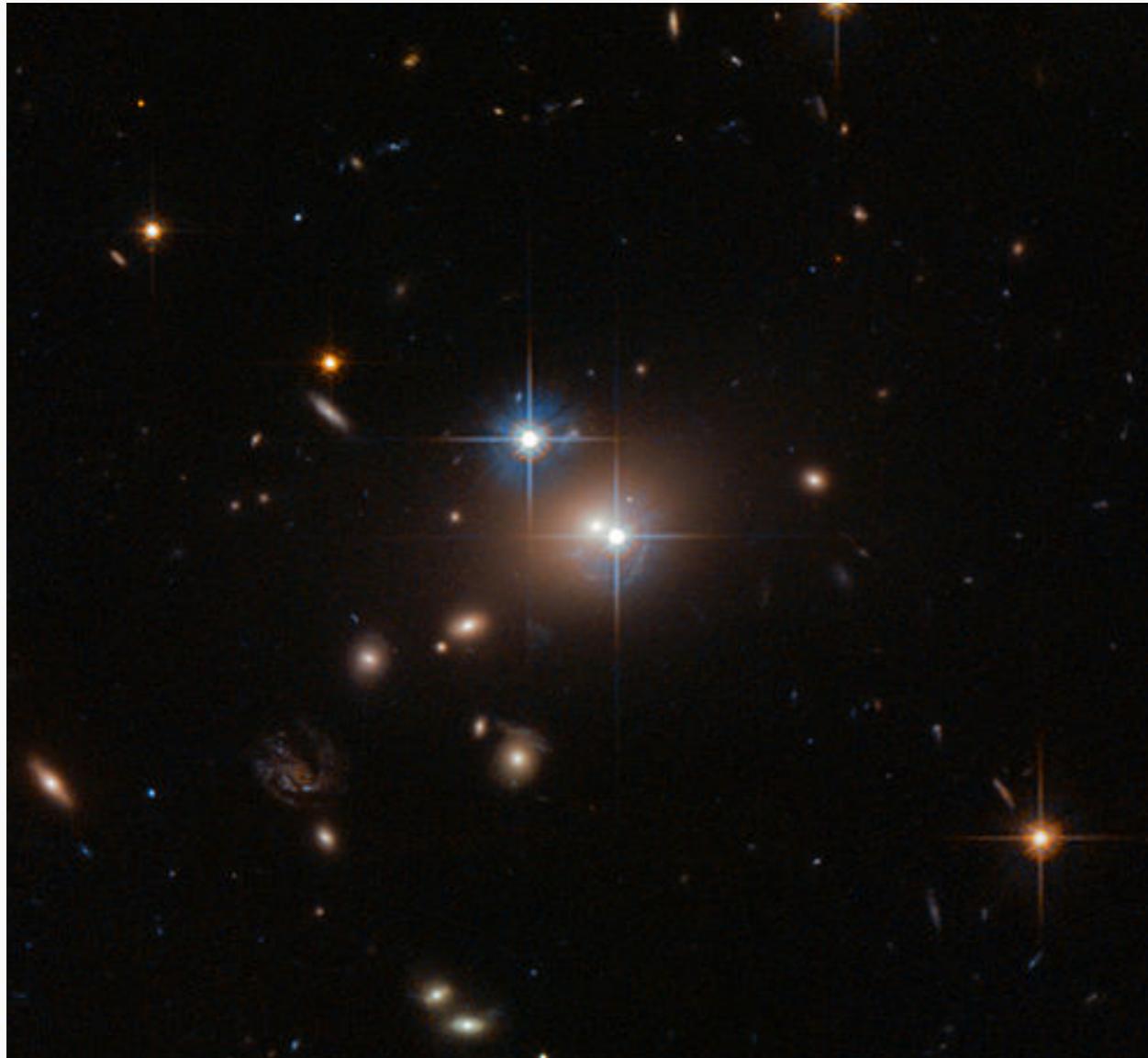
像平面 ( $\vec{\theta}_i$ )  
複数像を分解  
できている

# レンズ方程式の数値的求解



- 高いグリッド分解能は臨界曲線近傍でのみ必要となる
- **適合格子 (adaptive grid)**を使うことで効率的に重力レンズ方程式解ける
- 左の例では7つの複数像をうまく分離して求めることができている

# 強い重力レンズ解析



Hubble/ESA/NASA

NASA/ESA/CSA/STScI

- **観測量** : 複数像の位置、フラックス比

複数像形状 (銀河)、時間の遅れ (クエーサー、超新星etc)

# 強い重力レンズ解析

- 複数像の位置

光源の位置  $\beta$  が共通  $\rightarrow \theta_j - \alpha(\theta_j) = \theta_k - \alpha(\theta_k)$

質量分布への制限

- 実際にはカイ2乗を最小化しパラメータ決定

$$\chi^2_{\text{pos}} = \sum_{i=1}^{N_i} \sum_{j=1}^{N_{ij}} \frac{\left| \theta_{ij}^{\text{obs}} - \theta_{ij}(\beta_i; p_{\text{model}}) \right|^2}{\sigma_{ij}^2}$$

光源の数 各光源*i*の複数像の数  
位置の誤差

# 光源平面でのカイ2乗の評価

- カイ2乗の評価で重力レンズ方程式を解く必要

重力レンズ方程式→各光源*i*の複数像の位置

$$\chi_{\text{pos}}^2 = \sum_{i=1}^{N_i} \sum_{j=1}^{N_{ij}} \frac{\left| \theta_{ij}^{\text{obs}} - \theta_{ij}(\beta_i; p_{\text{model}}) \right|^2}{\sigma_{ij}^2}$$

- 近似的に評価し重力レンズ方程式求解を回避

$$\chi_{\text{pos}}^2 \simeq \sum_{i=1}^{N_i} \sum_{j=1}^{N_{ij}} \frac{\left| \left[ A(\theta_{ij}^{\text{obs}}; p_{\text{model}}) \right]^{-1} [\beta_{ij}^{\text{obs}}(p_{\text{model}}) - \beta_i] \right|^2}{\sigma_{ij}^2}$$

高速な評価が可能

# フラックス比および時間の遅れ

- フラックス比

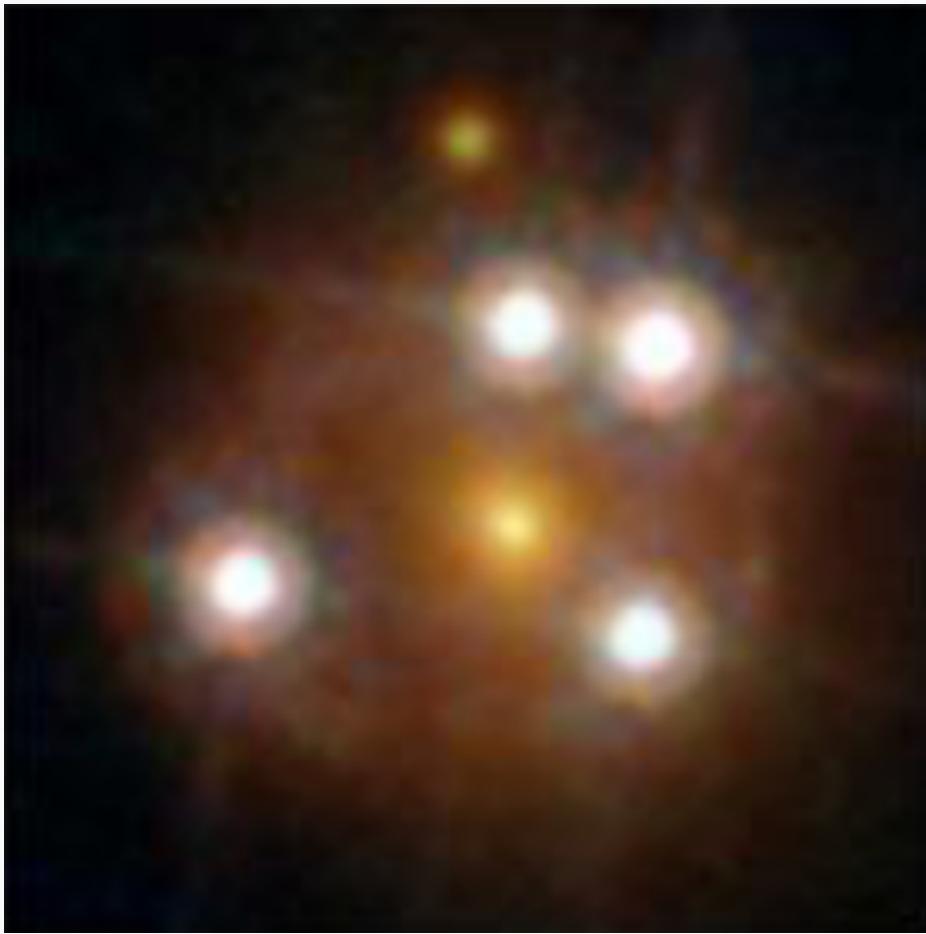
$$\chi_{\text{flux}}^2 = \sum_{i=1}^{N_i} \sum_{j=1}^{N_{ij}} \frac{\left[ f_{ij}^{\text{obs}} - \left| \mu_{ij}(\beta_i; p_{\text{model}}) \right| f_{\text{src},i} \right]^2}{\sigma_{f,ij}^2}$$

- 時間の遅れ

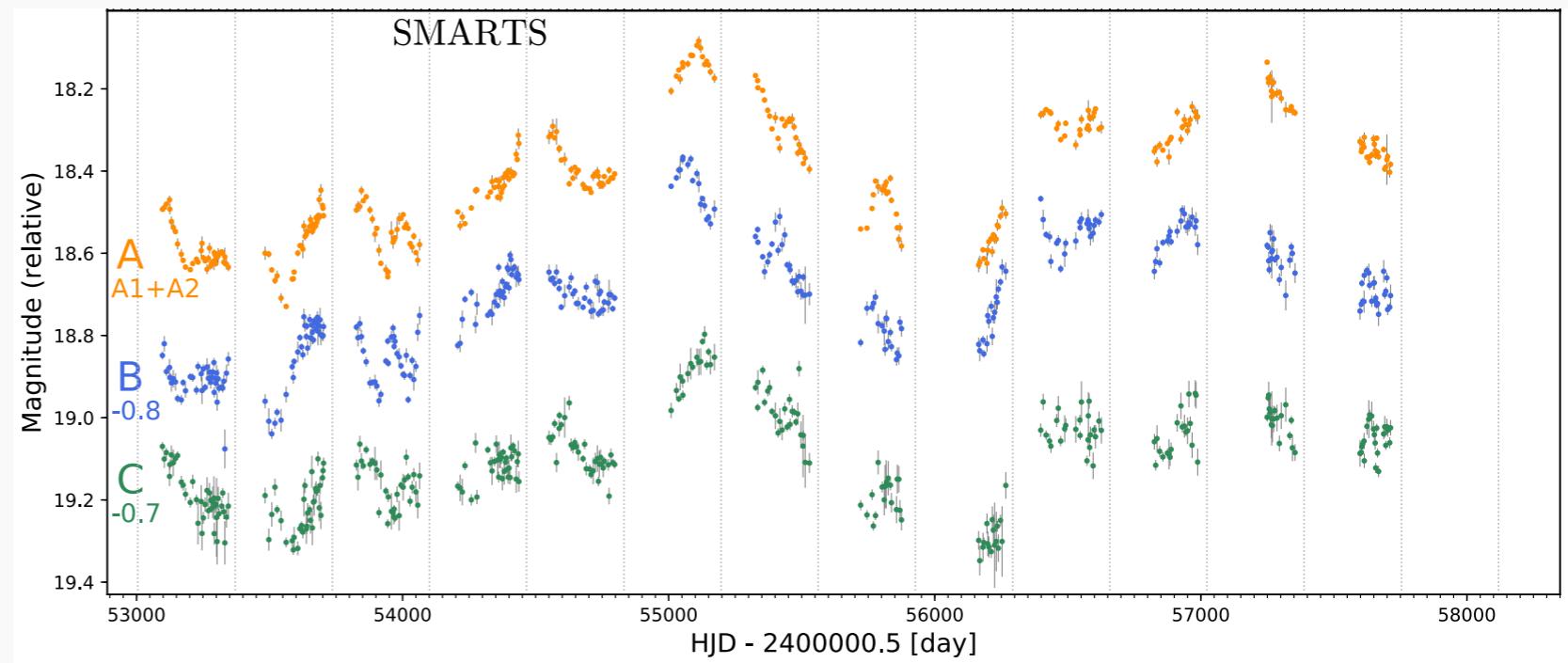
$$\chi_{\text{td}}^2 = \sum_{i=1}^{N_i} \sum_{j=1}^{N_{ij}} \frac{\left[ \Delta t_{ij}^{\text{obs}} - \Delta t_{ij}(\beta_i; p_{\text{model}}) - \Delta t_i \right]^2}{\sigma_{\Delta t,ij}^2}$$

# 例: クエーサー重力レンズ

- 四重像クエーサー重力レンズ WFI2033-4723  
 $z_s = 1.662, z_l = 0.661$ , 最大分離角 2.53 秒角



Suyu+2017



Bonvin+2019

13年 (!) のモニタ観測に基づく  
時間の遅れの測定 (最大~60日)

# 質量モデリング

- WFI2033-4723の質量モデリング  
観測的制限: 像+レンズ銀河の位置、  
フラックス比、時間の遅れ

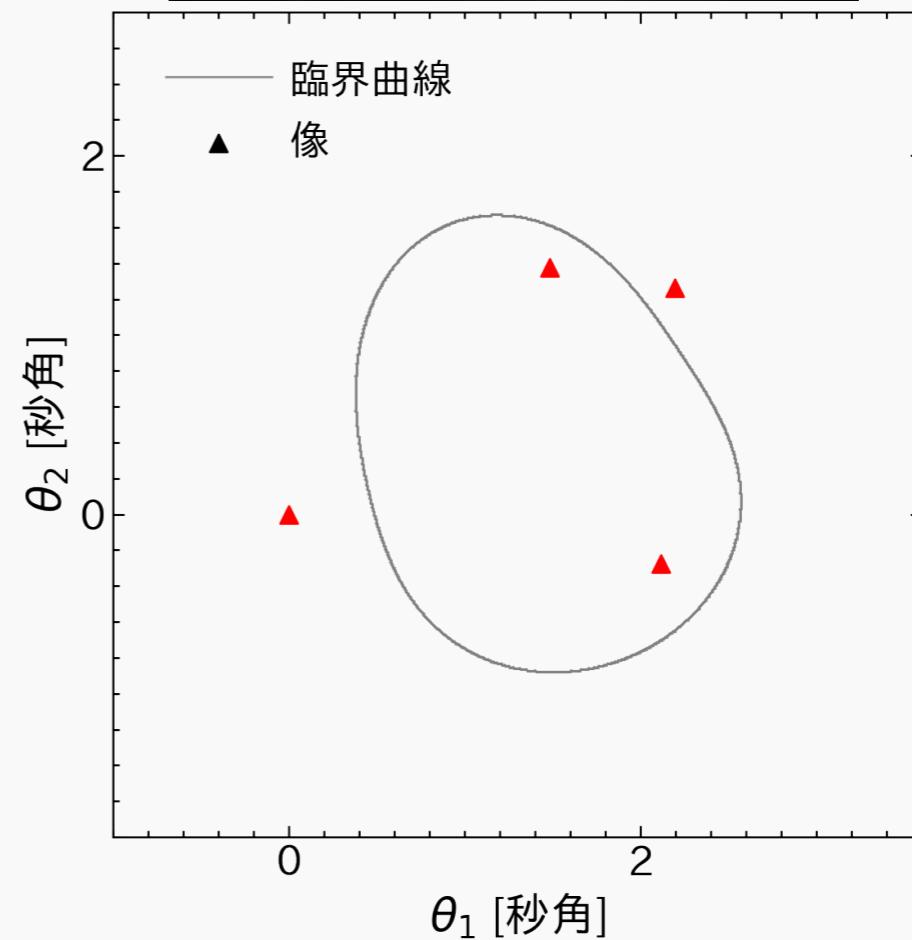
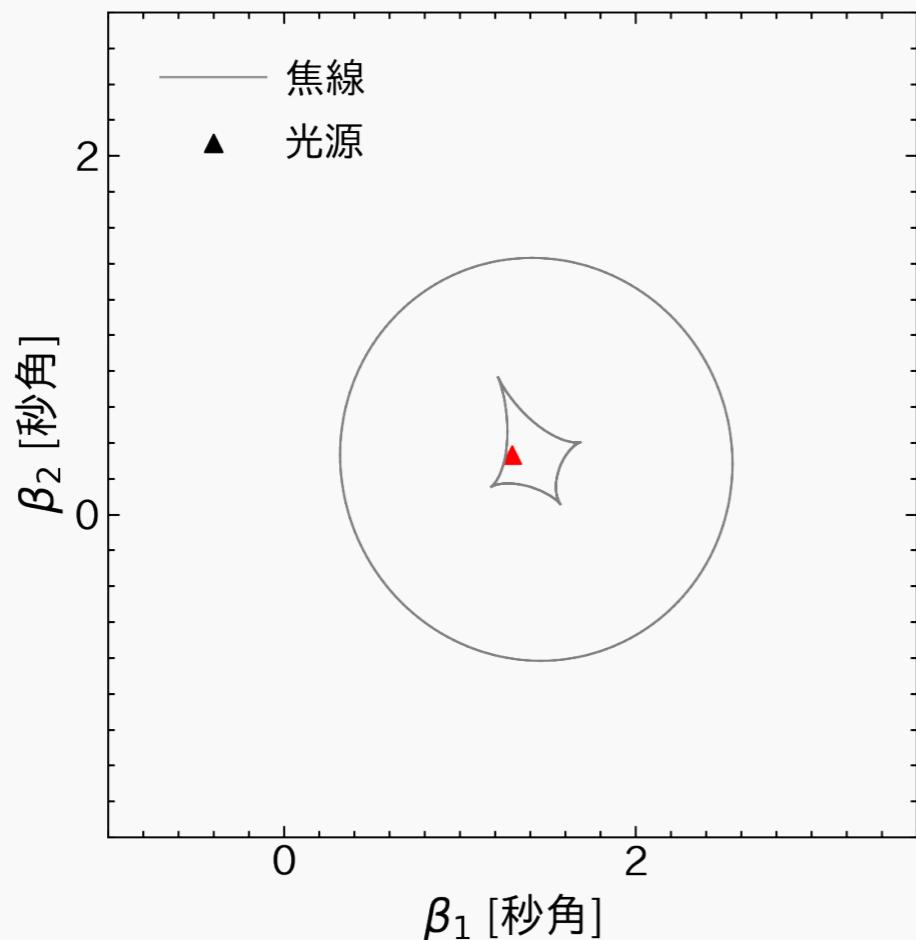
$$\mathbf{N_{const}=15}$$

仮定するモデル: 特異等温楕円体+外部歪み場  
+高次の摂動(+光源の位置,  $H_0$ )

$$\mathbf{N_{param}=12}$$

# 質量モデリングの結果

- 観測された複数像の位置 etc. を再現
- $\chi^2=4.3$  (自由度3)



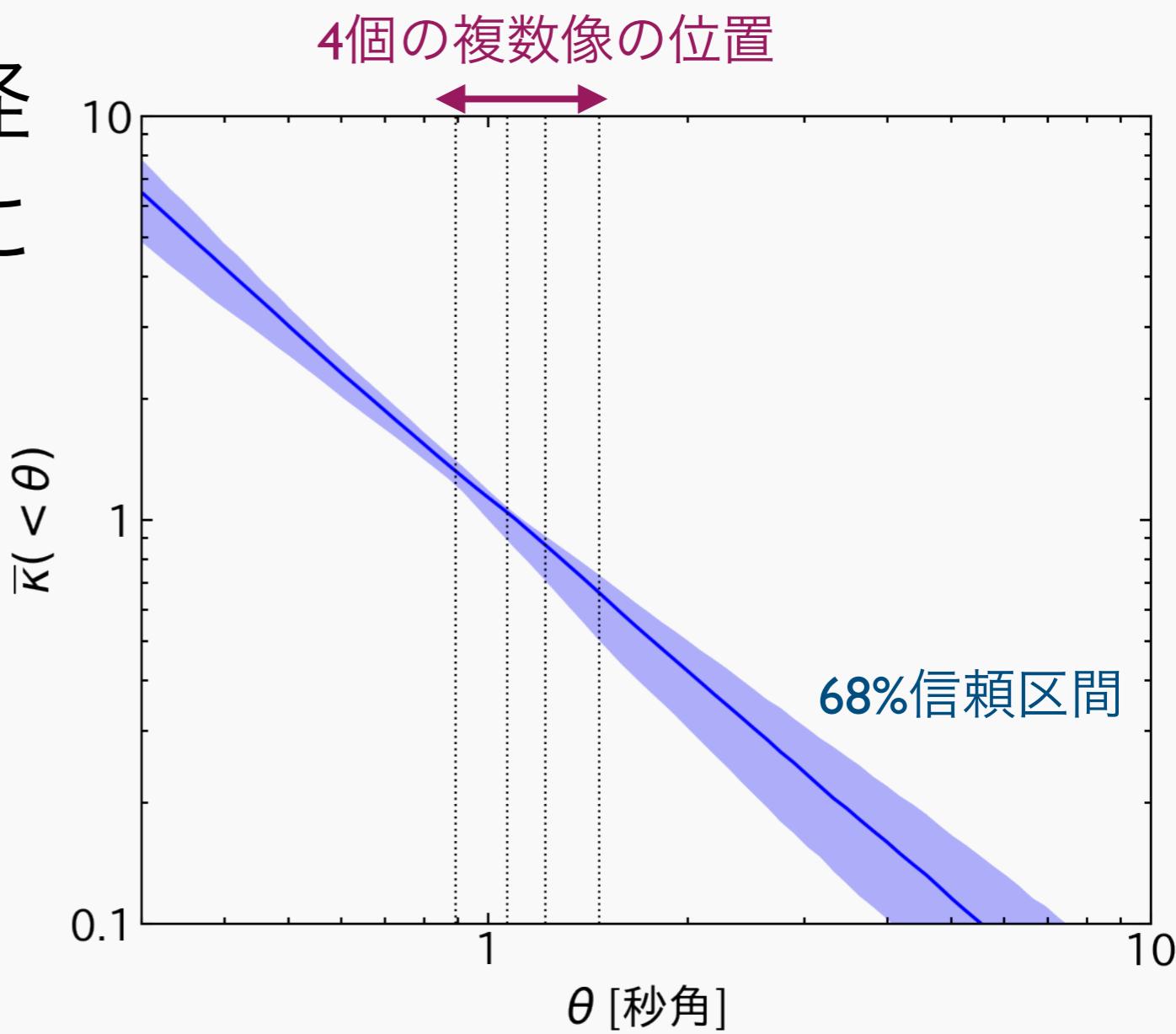
# 幕分布橙円体への拡張

- 幕への制限は弱い  $\rho(r) \propto r^{-\eta}$

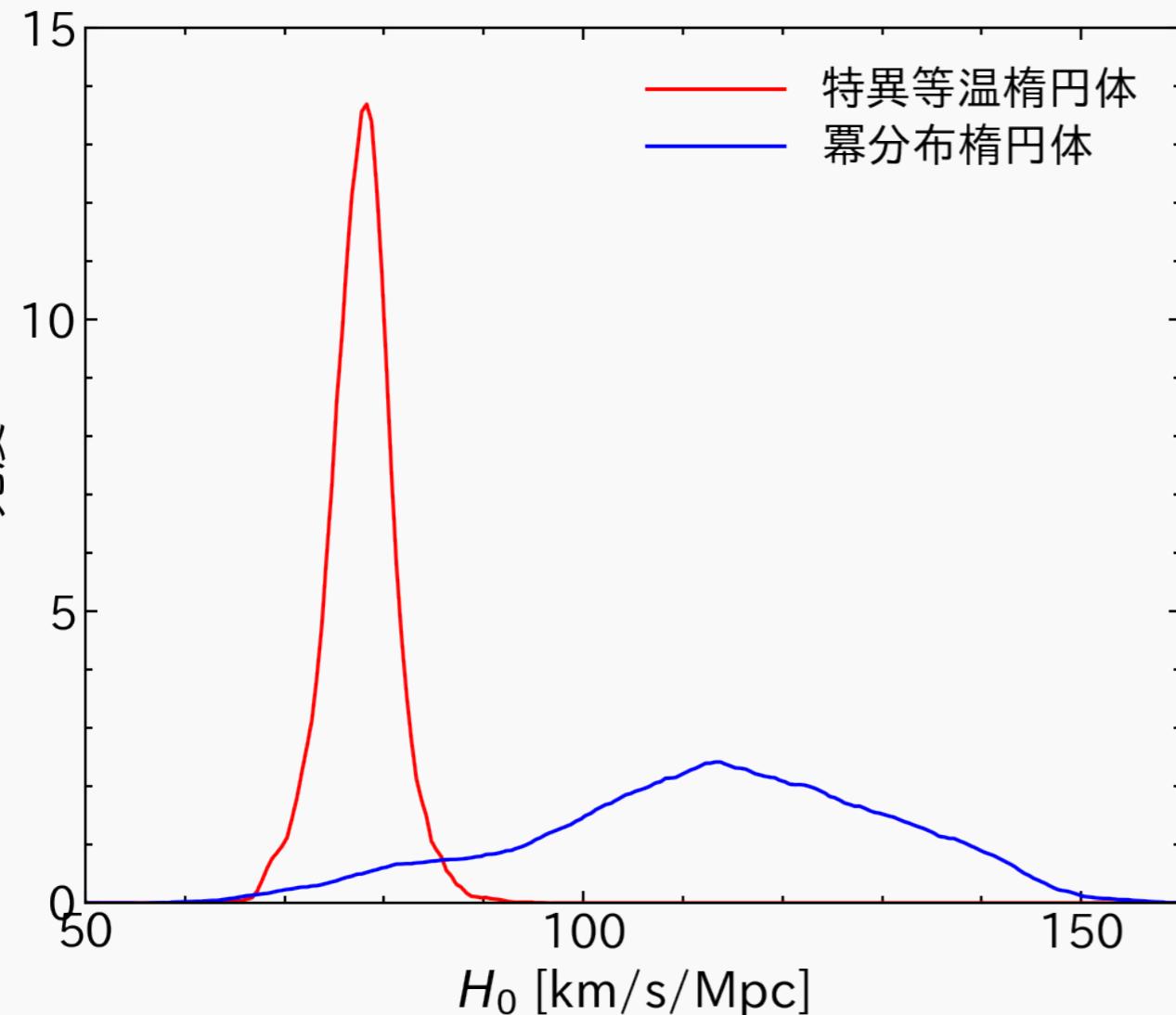
- アインシュタイン半径内の質量は、モデルによらず決まる

$$\bar{\kappa}(<\theta_{\text{Ein}}) = 1$$

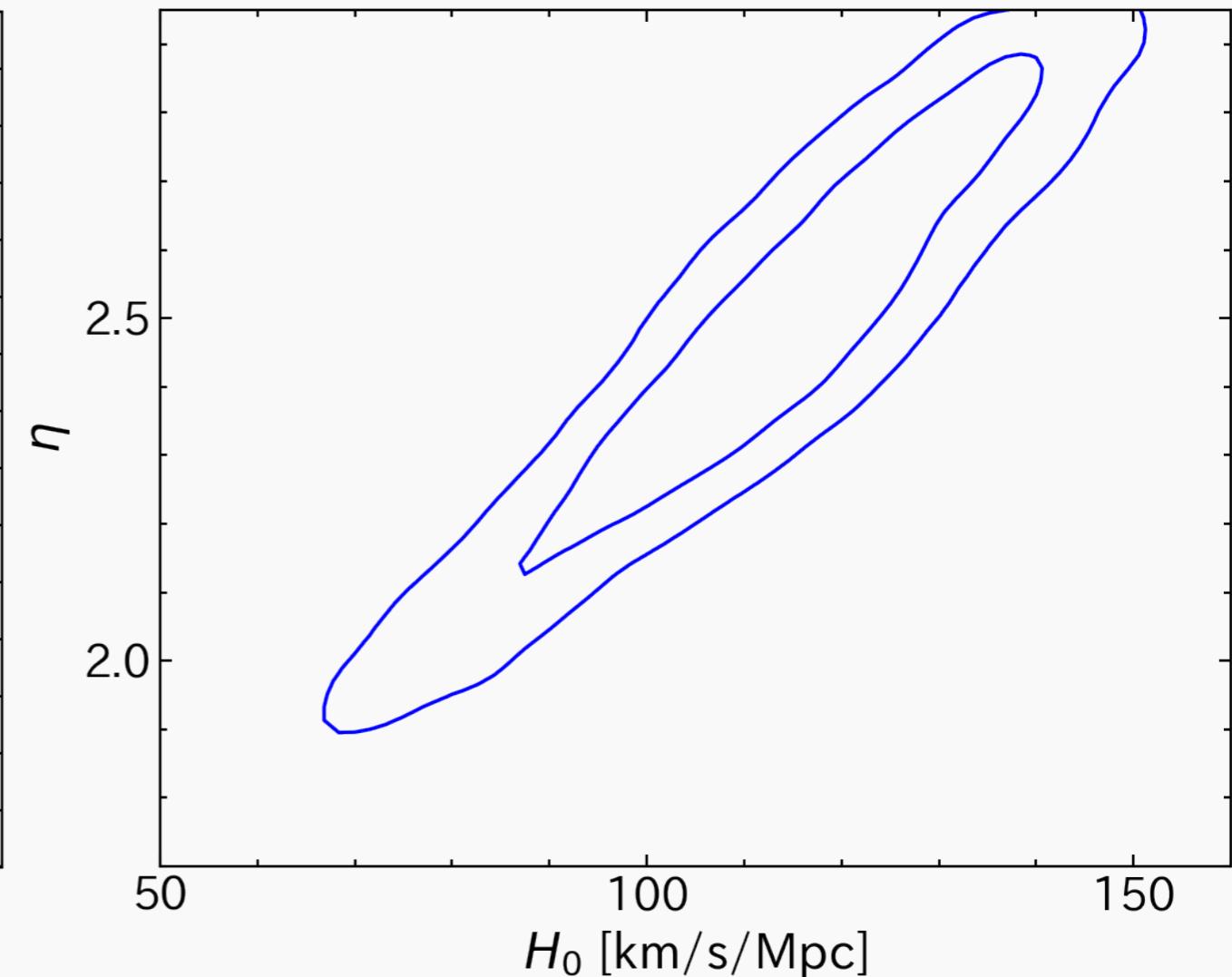
$$\theta_{\max} \simeq 2\theta_{\text{Ein}}$$



# ハッブル定数の制限



- 幕分布では制限が弱い



- 幕と  $H_0$  の縮退  
( $\approx$  質量薄板縮退)

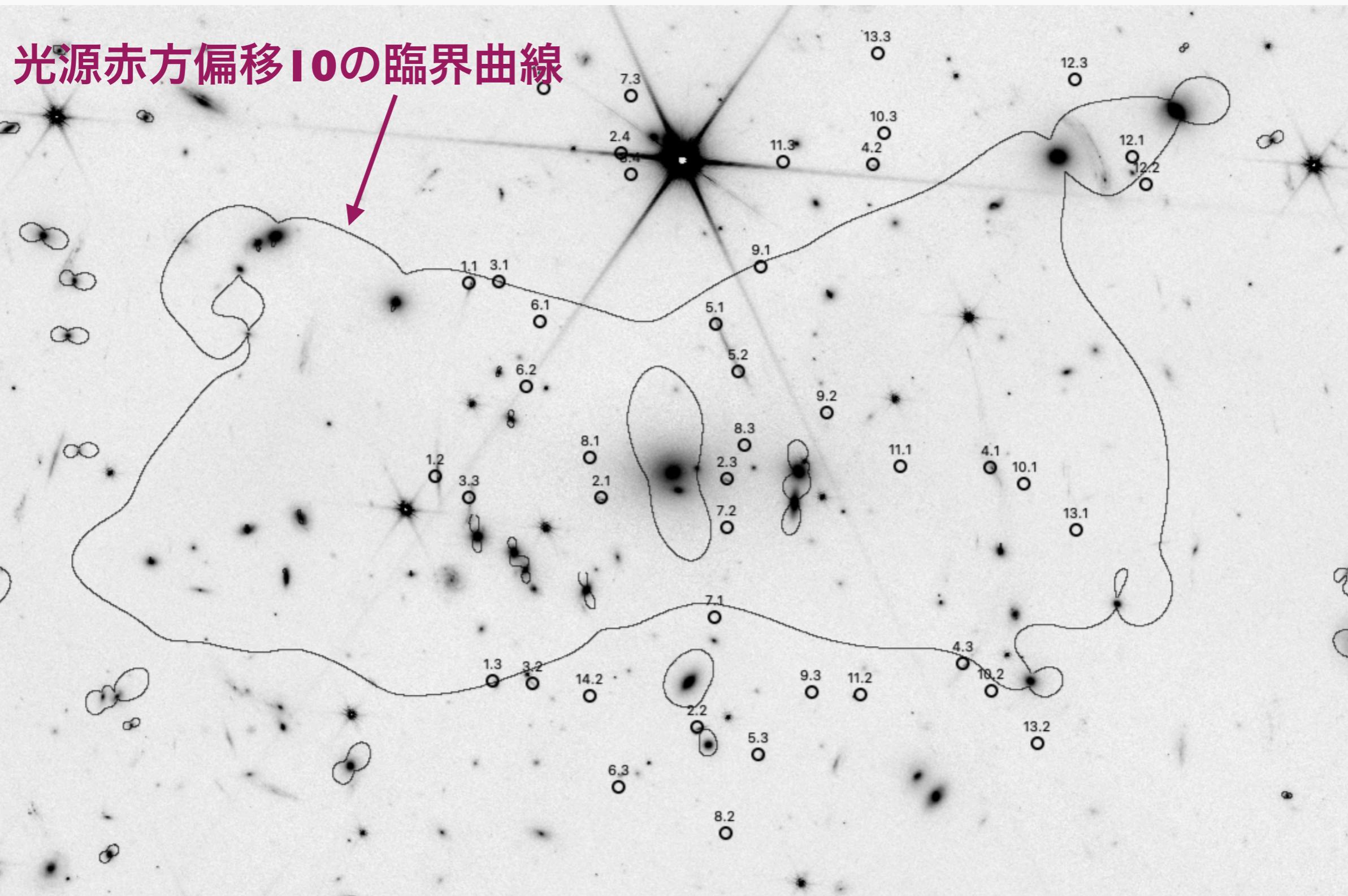
# 例: 銀河団重力レンズ



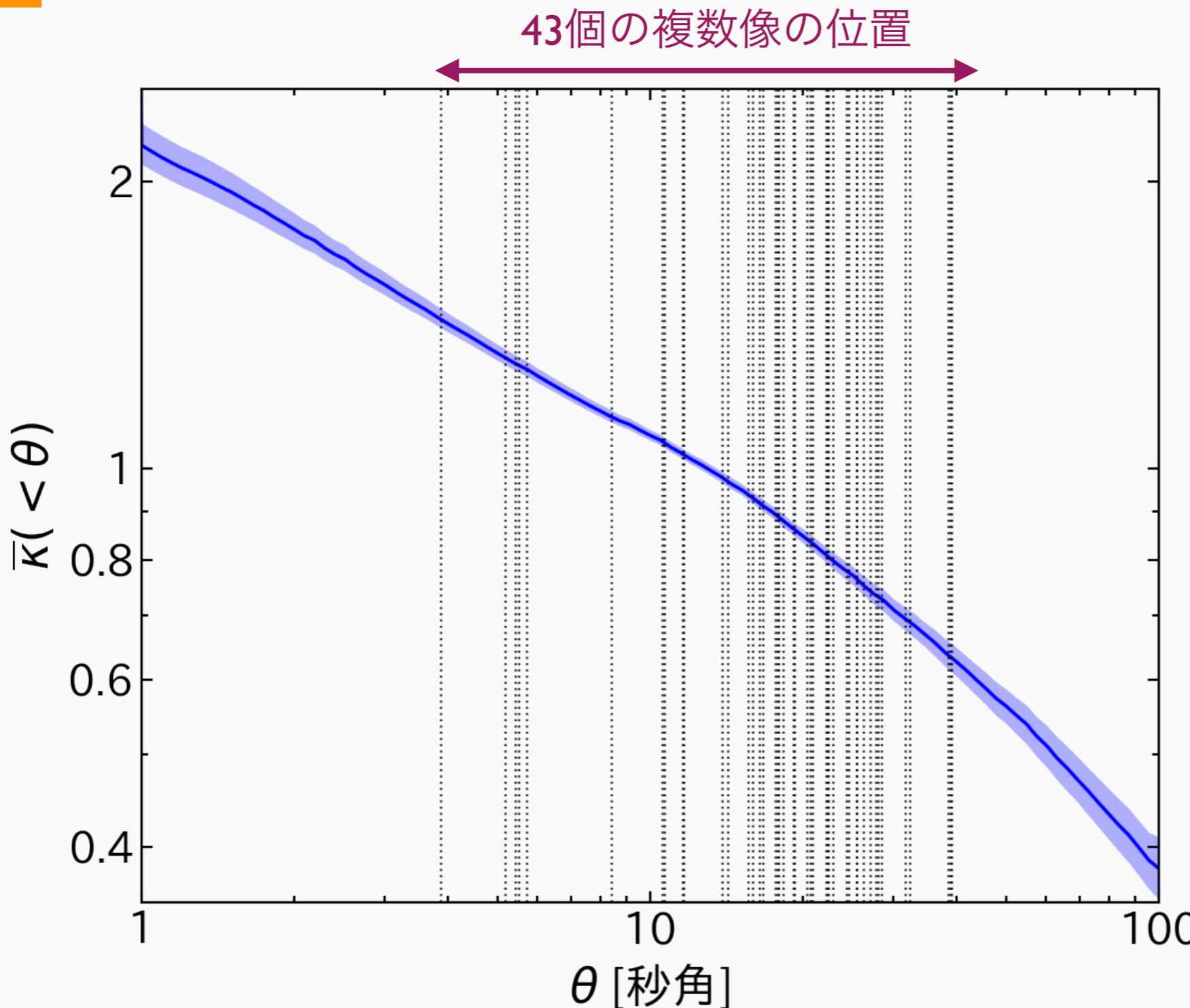
JWSTの  
最初の  
観測対象  
の一つ

14個の  
背景銀河  
から、  
43個の  
複数像

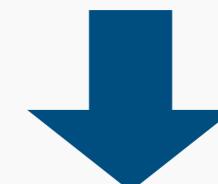
# 最適化された質量モデル



# 平均収束場



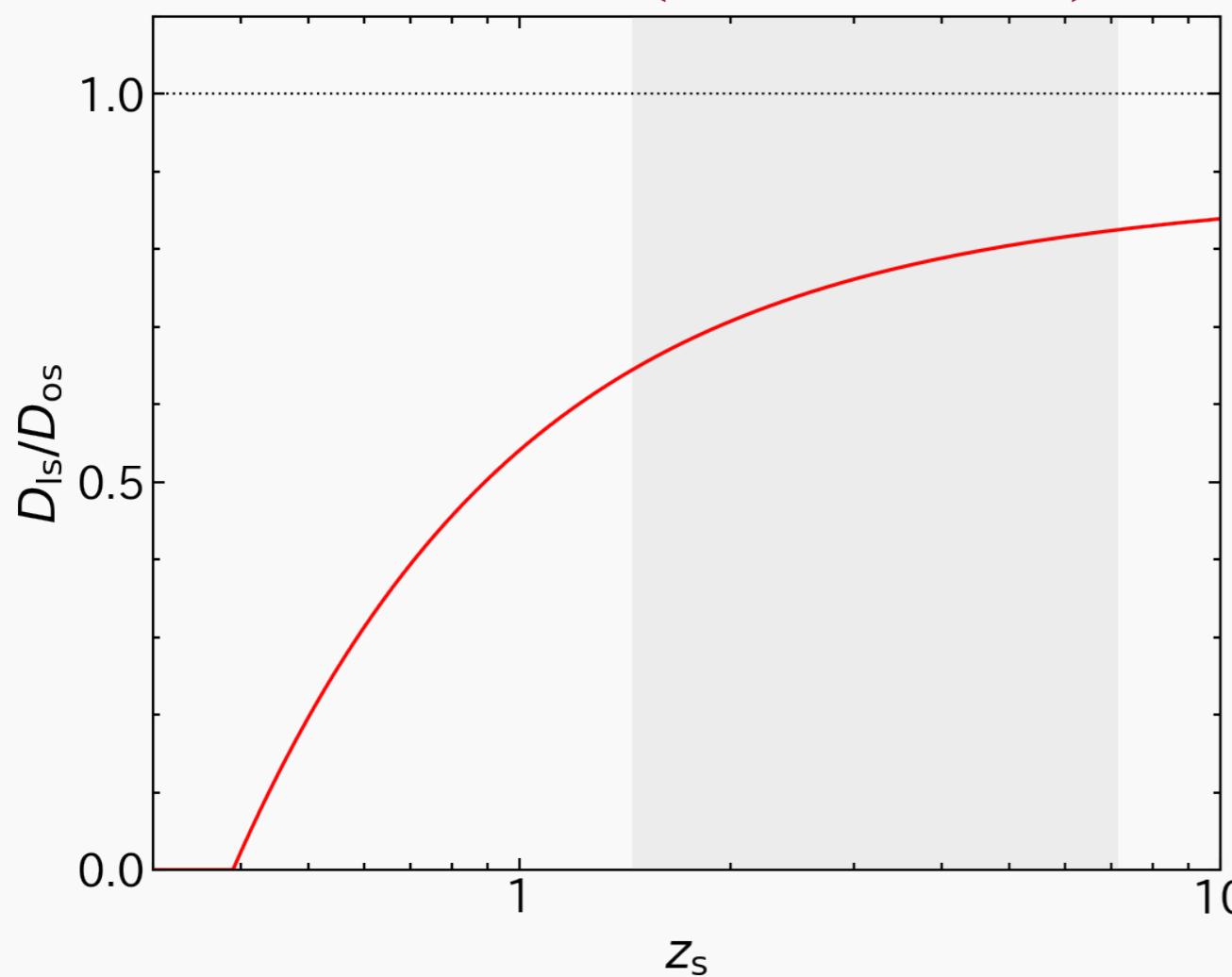
幅広い半径にわ  
たって複数像が  
存在



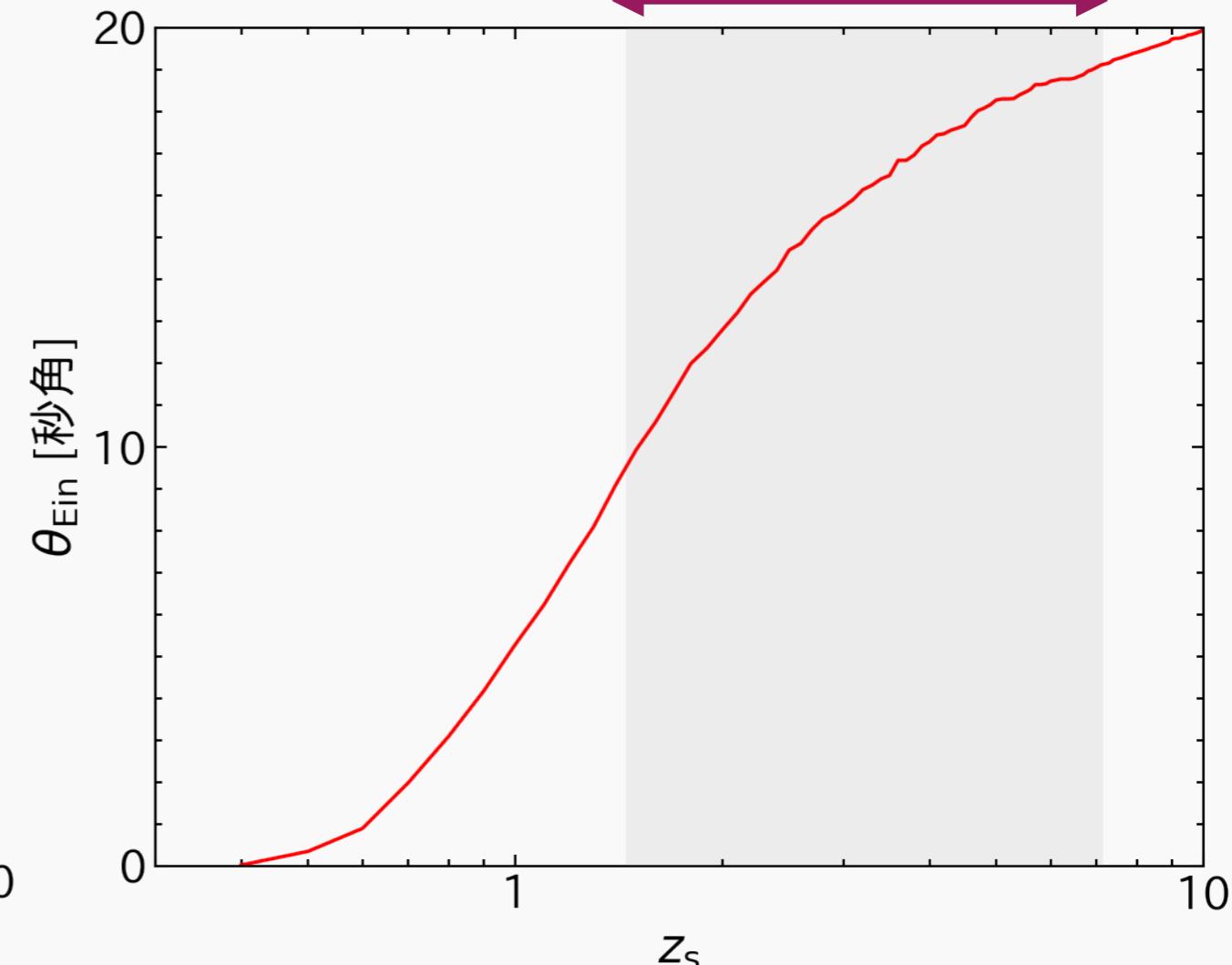
密度分布を、幕  
まで含めてよく  
制限できる

# 光源赤方偏移依存性

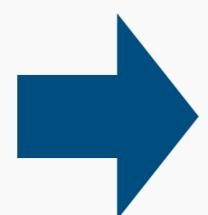
|4個の光源の赤方偏移の範囲|



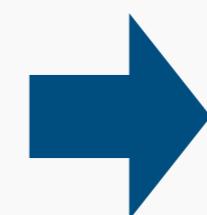
|4個の光源の赤方偏移の範囲|



$$\Sigma_{cr}^{-1} \propto \frac{D_{ls}}{D_{os}}$$

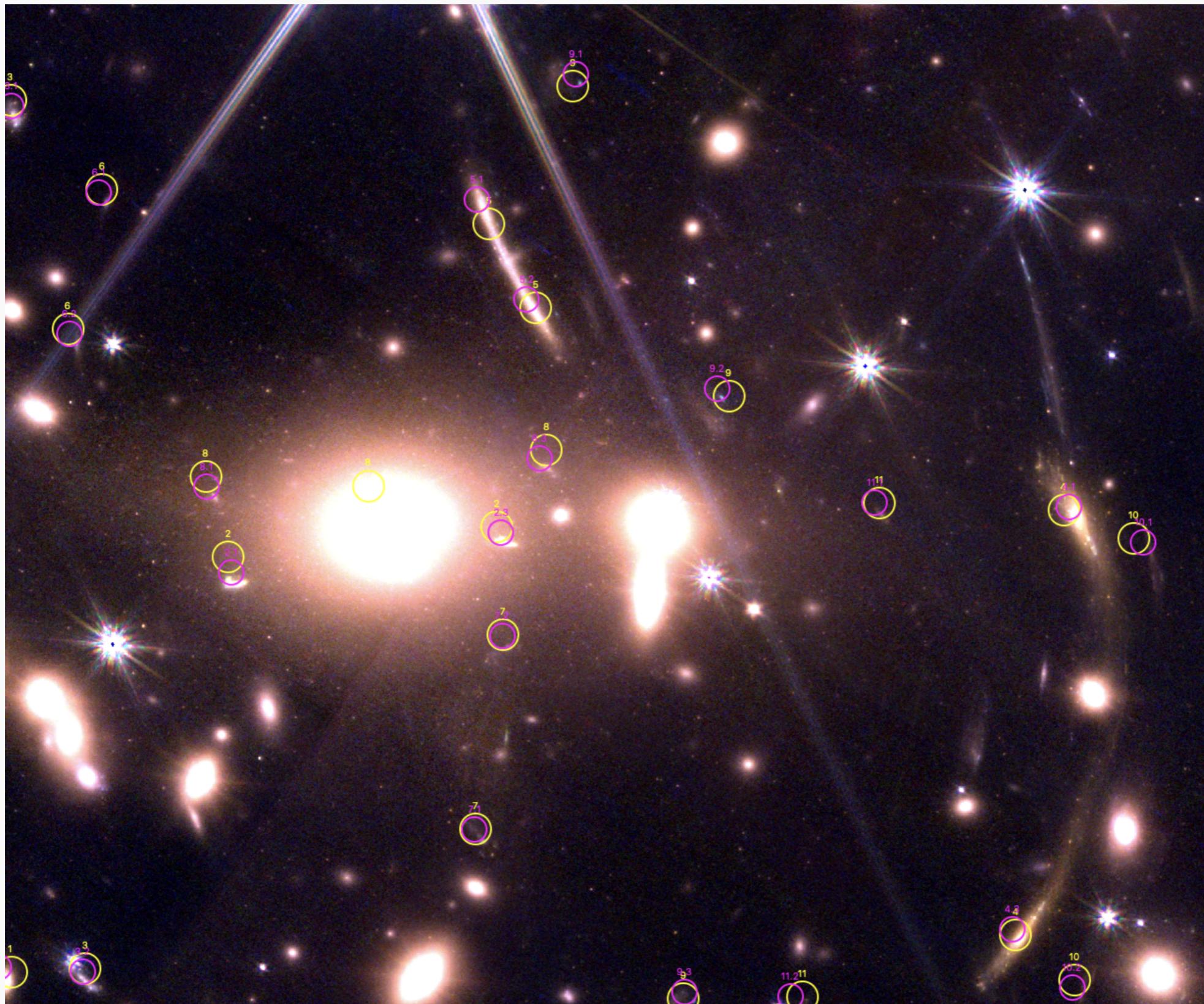


$\theta_{Ein}$ が光源の  
赤方偏移依存



複数の半径で  
 $\bar{k}(<\theta_{Ein}) = 1$   
の制限

# 銀河団強重力レンズ解析の問題点



# 観測された 像の位置

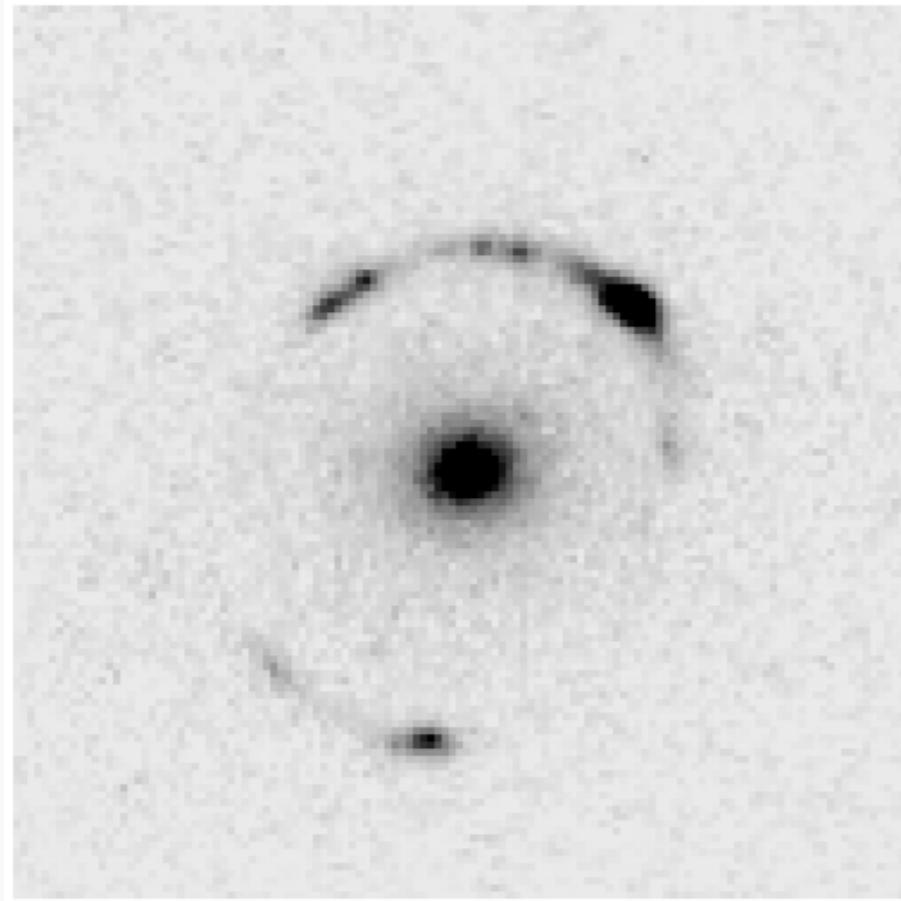
# 質量モデルで 予言された 位置

有意な  
(大きな)  
位置のずれ

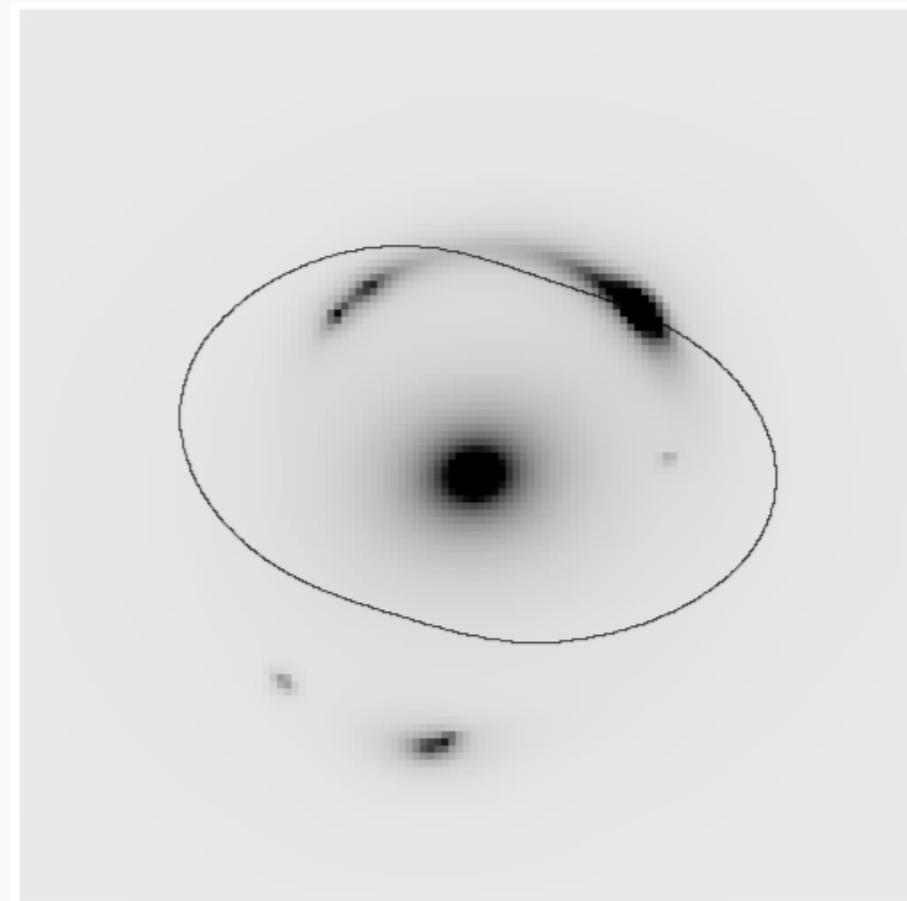
# 実際の構造 の複雑さに 起因

# 例: 広がった光源

SDSSJ002927.38+254401.7 (Shu+2016)



質量モデリングの結果

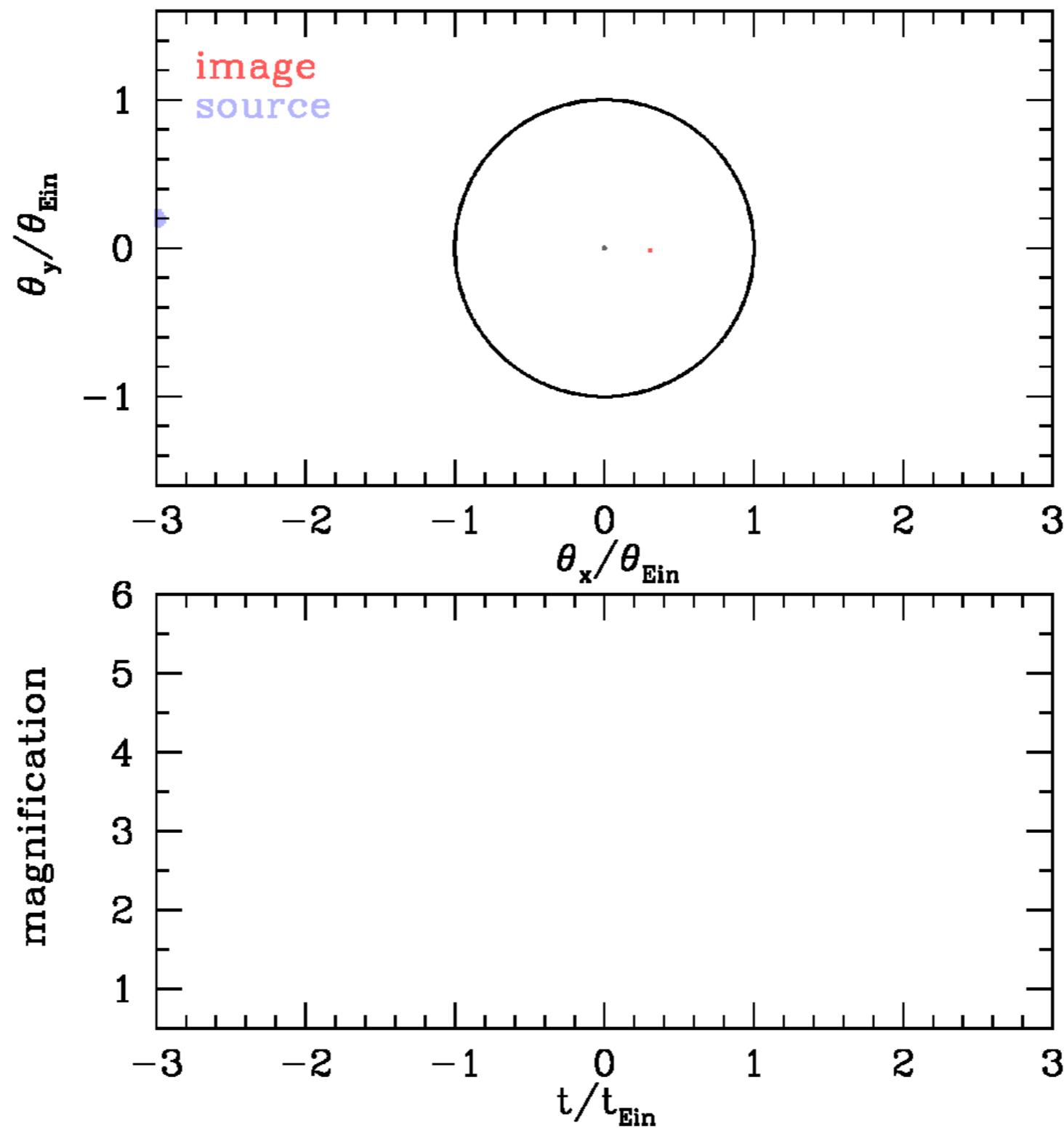


- 全てのピクセルをフィット

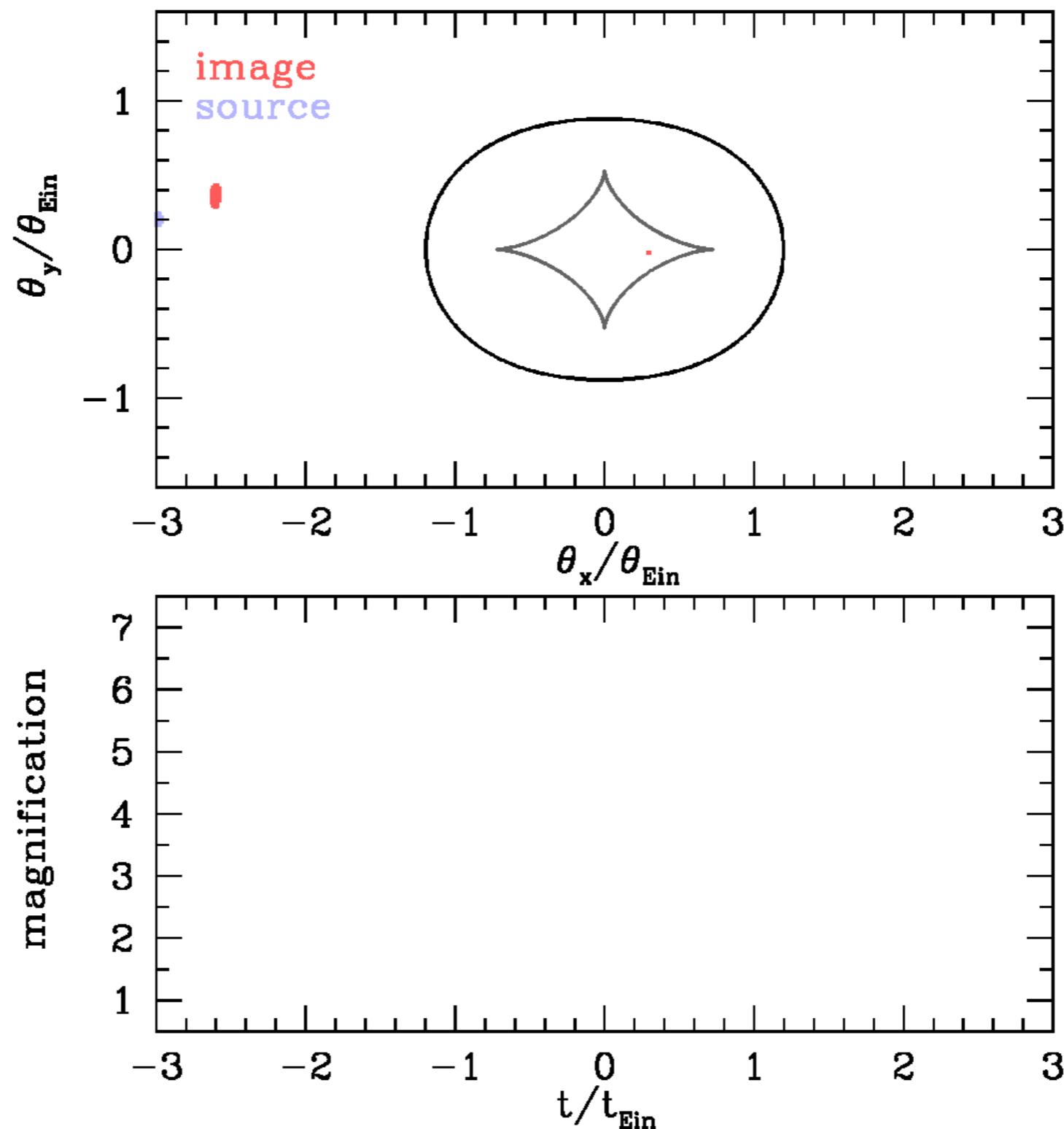
$$\chi_{\text{ext}}^2 = \sum_{i_x=1}^{N_x} \sum_{i_y=1}^{N_y} \frac{\left[ f^{\text{obs}}(i_x, i_y) - f(i_x, i_y; \mathbf{p}_{\text{source}}, \mathbf{p}_{\text{model}}) \right]^2}{\sigma^2(i_x, i_y)}$$

課題: **計算コスト**  
**光源の複雑さ**  
**質量分布の複雑さ**  
...

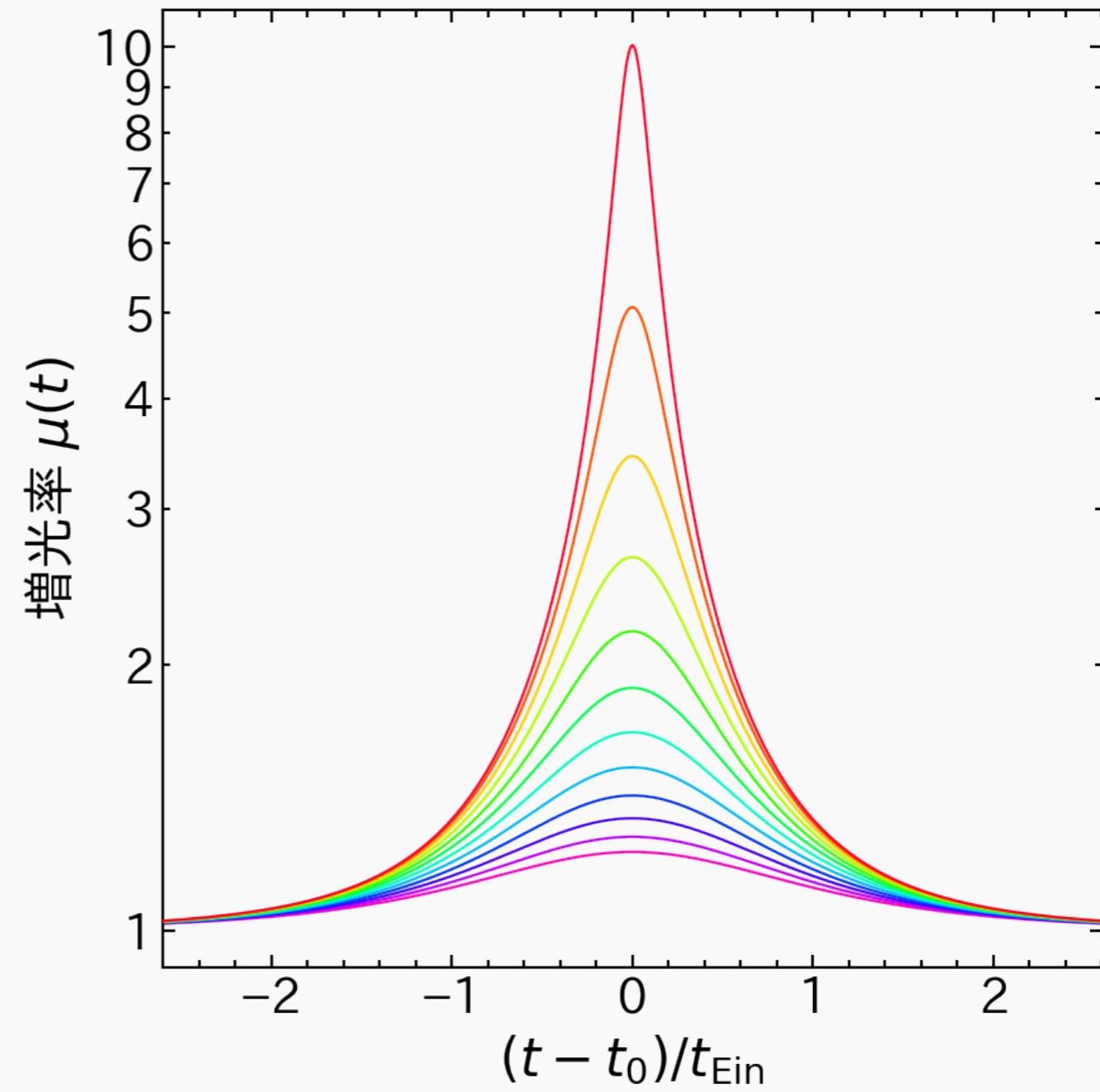
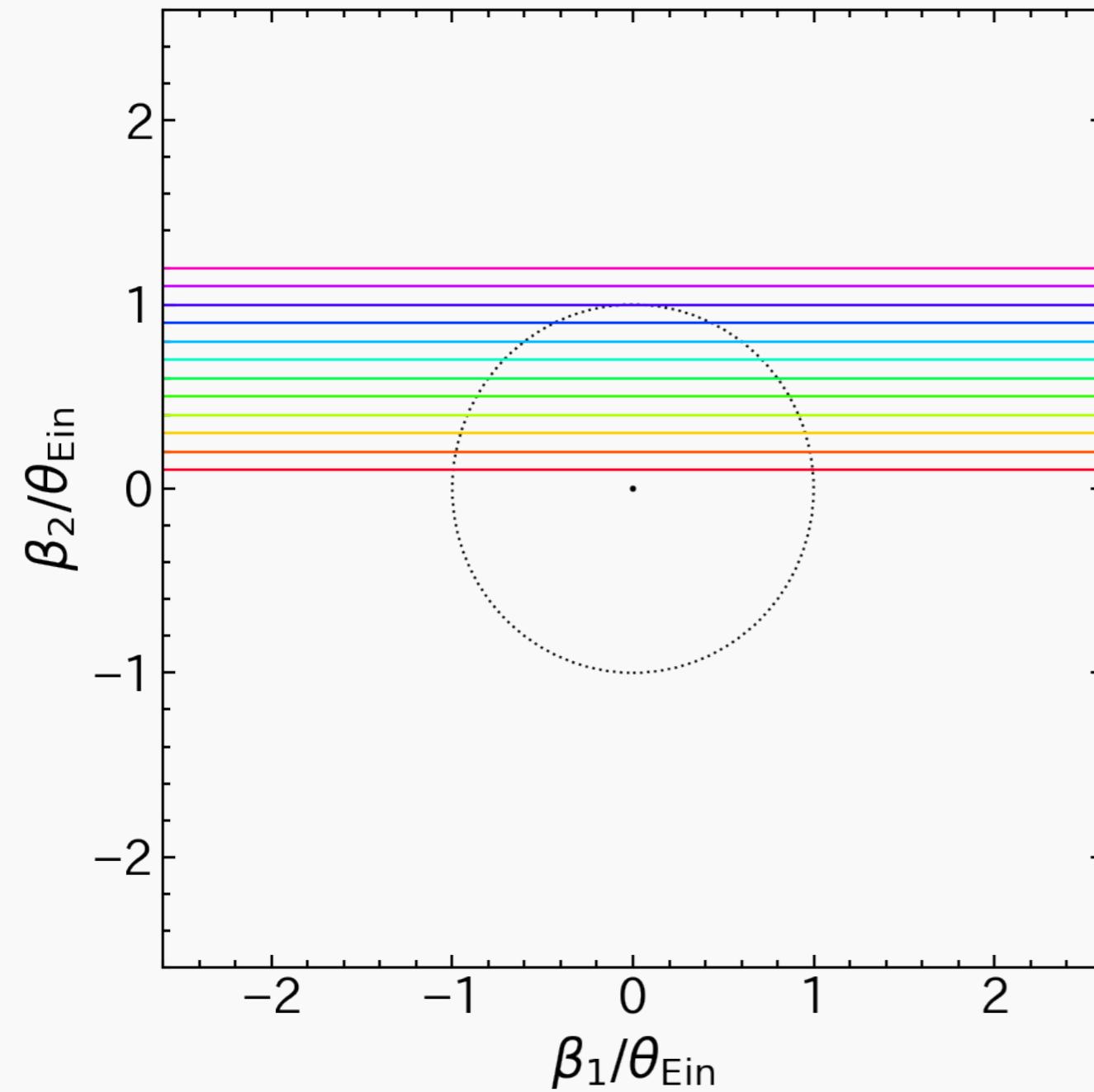
# 重力マイクロレンズ（点質量レンズ）



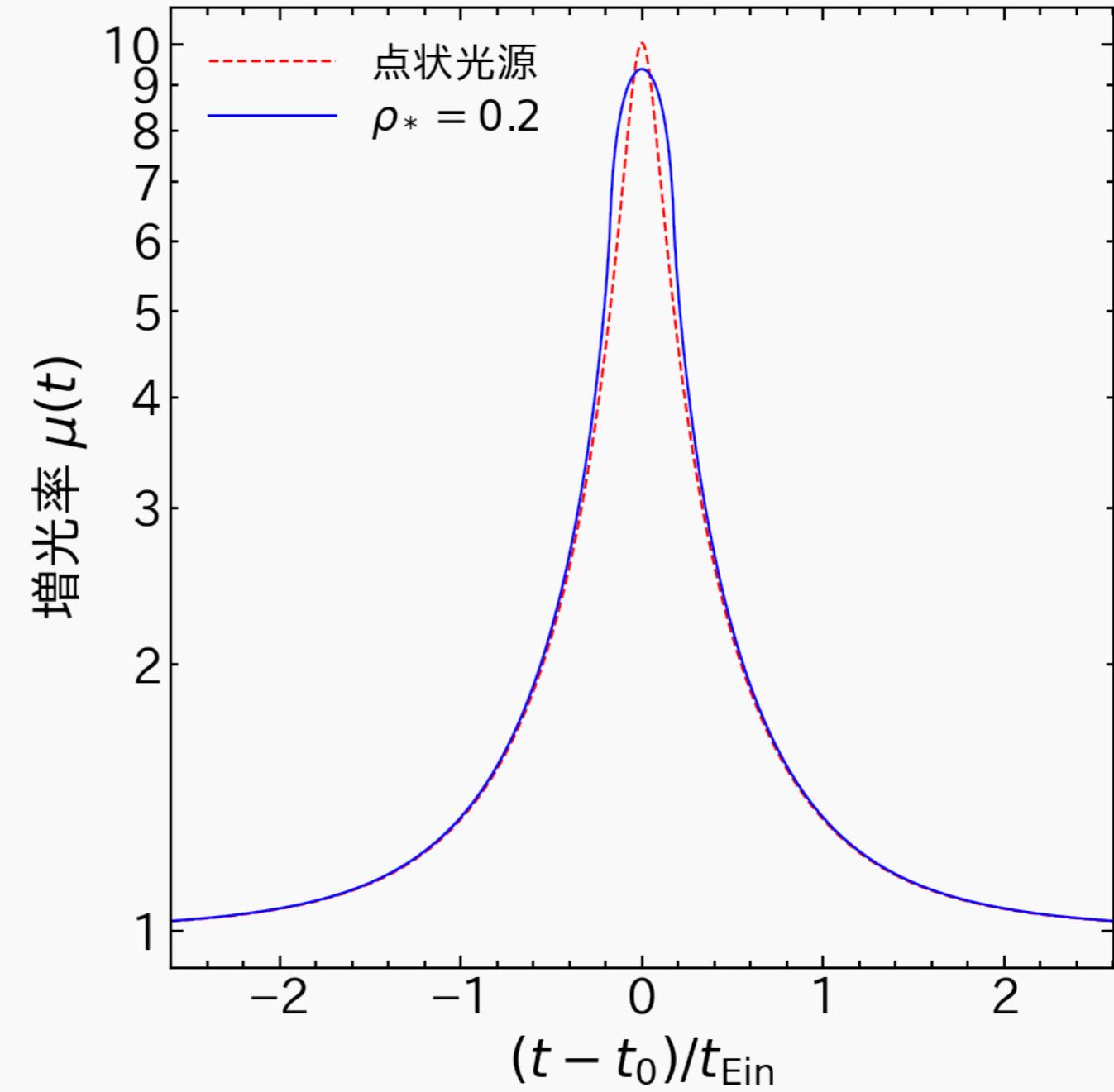
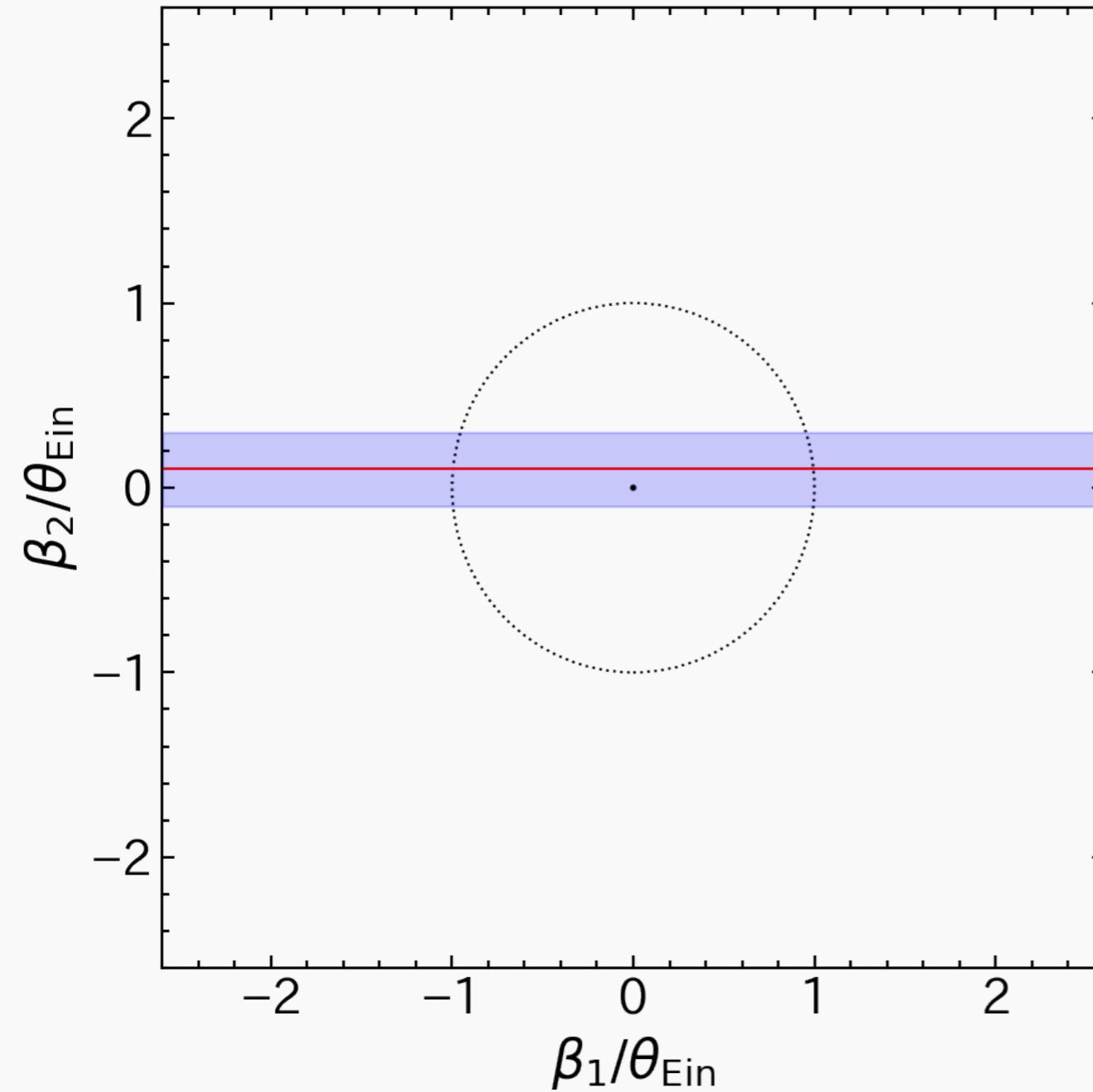
# 重力マイクロレンズ（焦線通過）



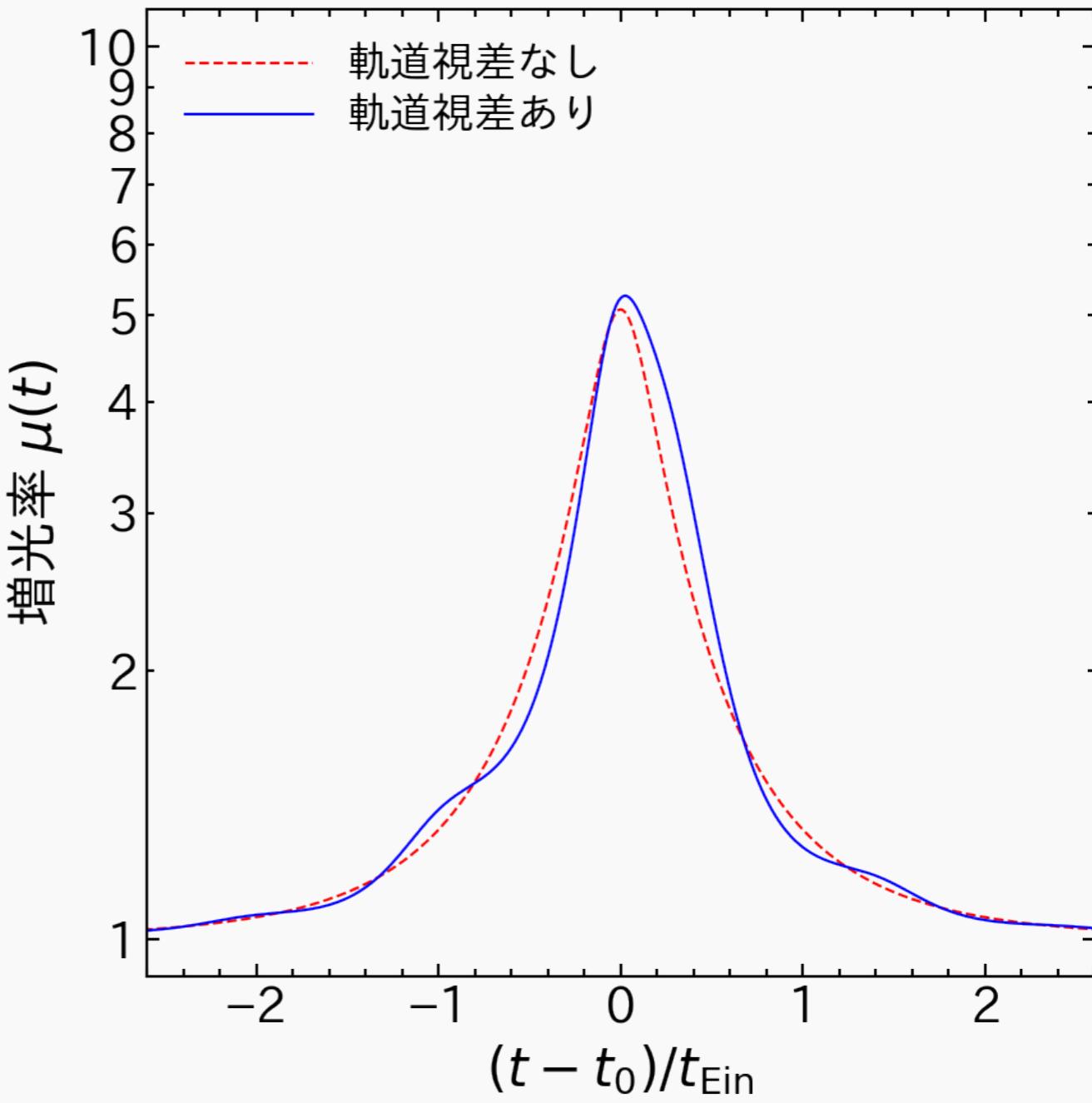
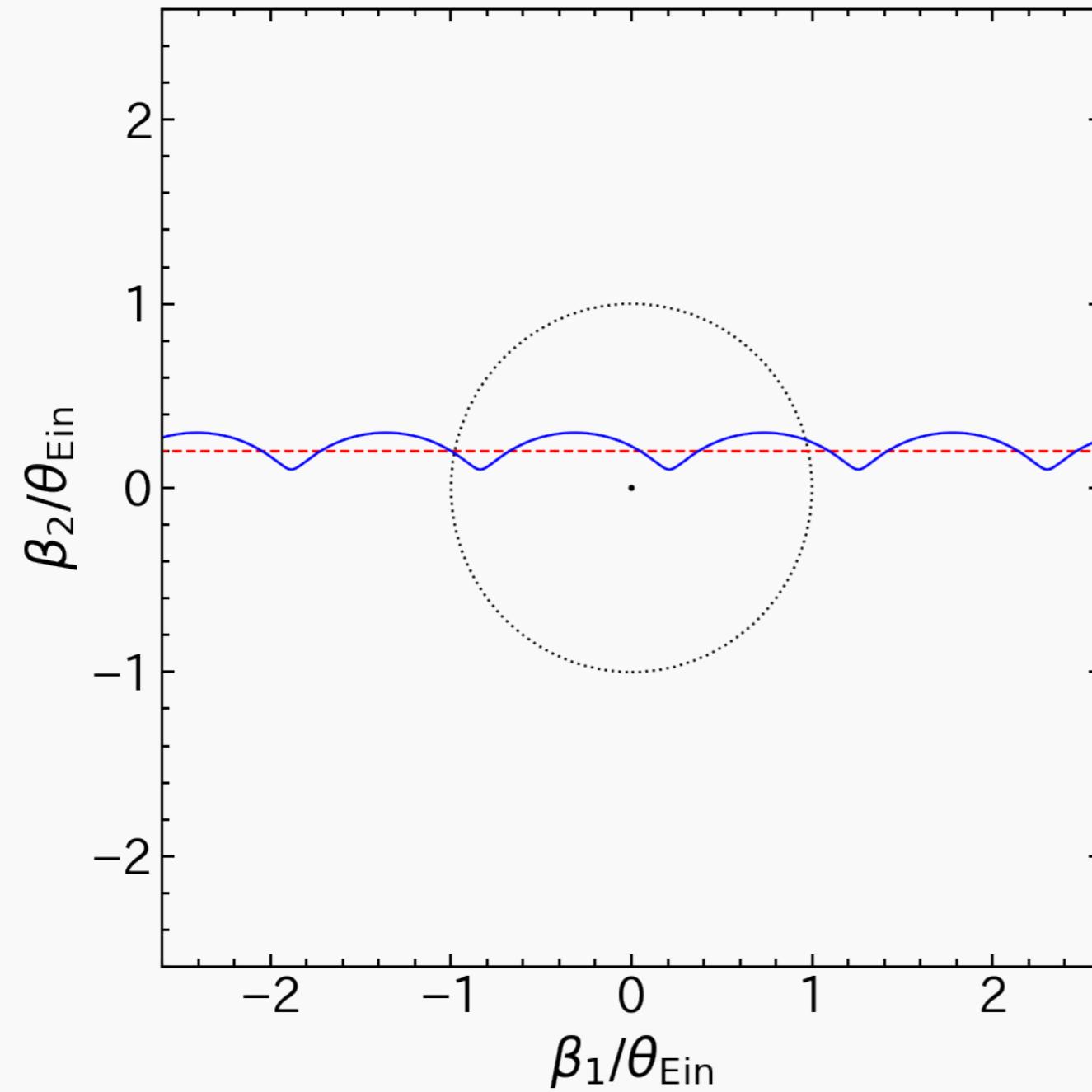
# 点質量レンズの増光曲線



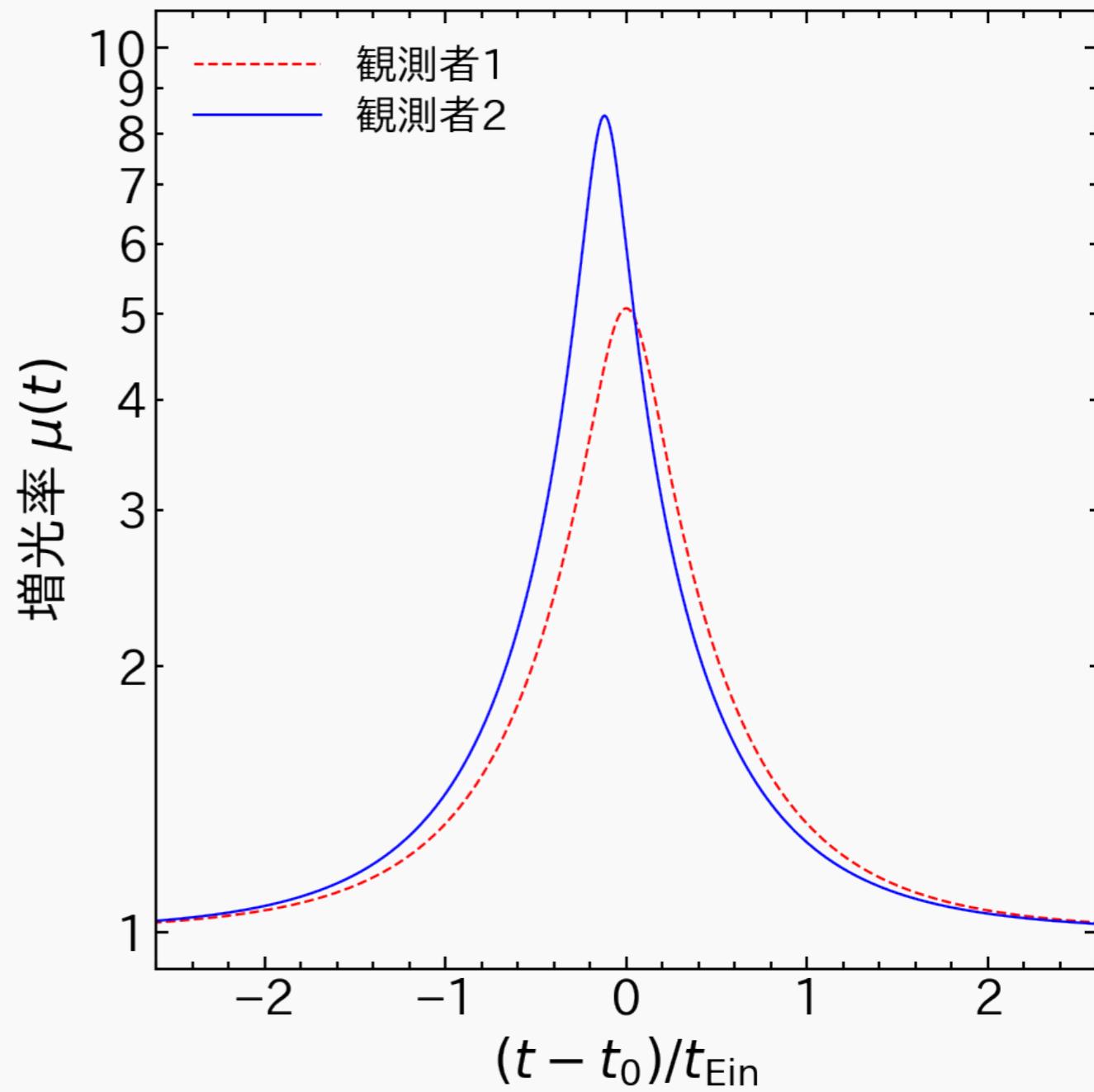
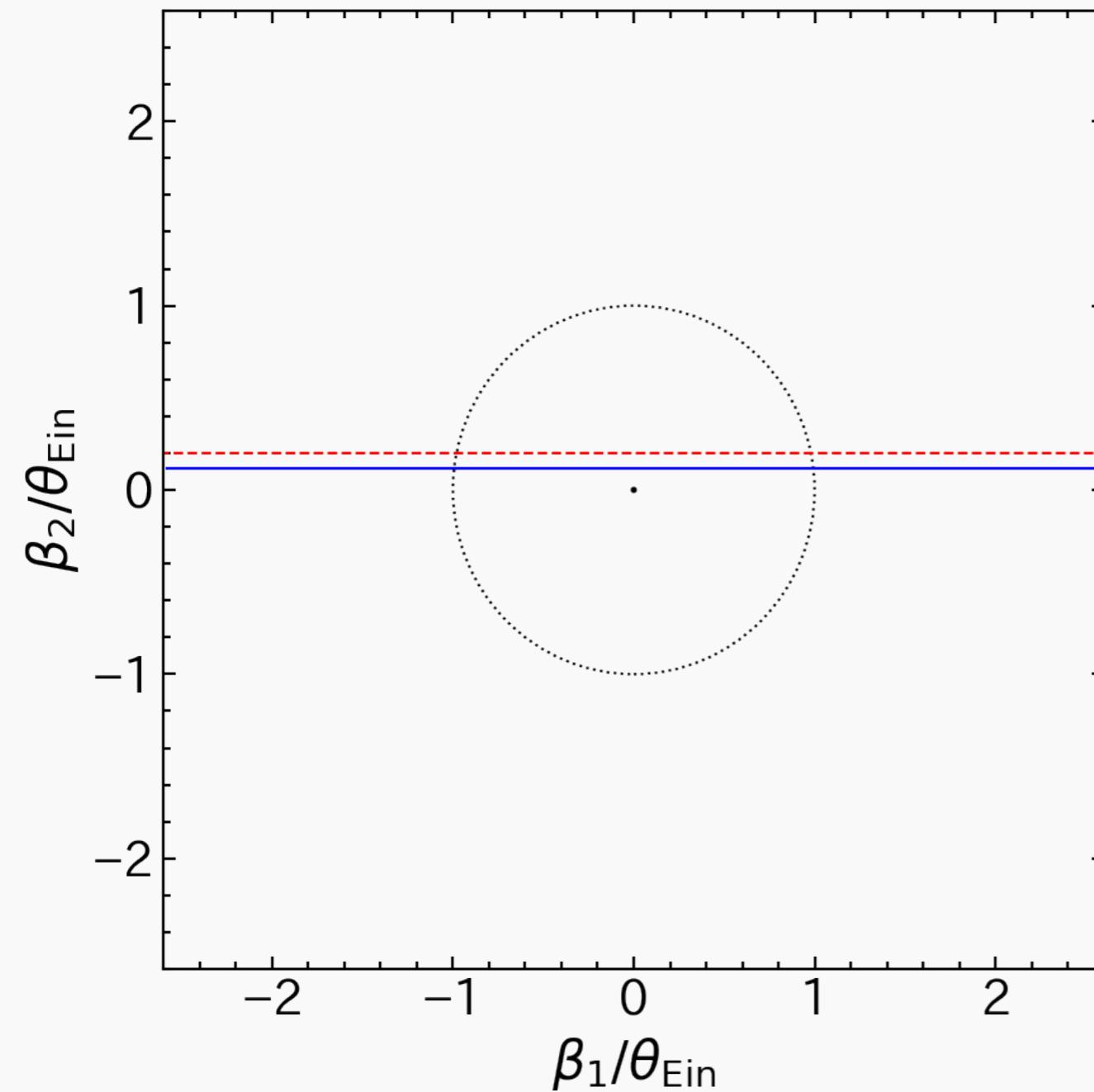
# 光源の大きさの影響



# 重力マイクロレンズ視差（軌道視差）



# 重力マイクロレンズ視差 (3角視差)



# 重力マイクロレンズ確率

- 強い重力レンズ確率と同様の計算

$$P_{\text{ml}}(z_s; > \mu_{\text{th}}) = \int_0^{z_s} dz_l \frac{d^2 V}{dz_l d\Omega} \int_0^\infty dM \frac{dn}{dM} \sigma_{\text{ml}}(M; z_l, z_s, > \mu_{\text{th}})$$

- 重力マイクロレンズ断面積

$$\sigma_{\text{ml}}(M; z_l, z_s, > \mu_{\text{th}}) = \pi \theta_{\text{Ein}}^2 y_{0, \max}^2(\mu_{\text{th}})$$

点質量レンズの  
インシュタイン半径

$$= \frac{4\pi G M}{c^2} \frac{D_{ls}}{D_{ol} D_{os}} y_{0, \max}^2(\mu_{\text{th}})$$

レンズ質量Mに比例

$$y_{0, \max}^2(\mu_{\text{th}}) := \frac{2}{\mu_{\text{th}} \sqrt{\mu_{\text{th}}^2 - 1} + \mu_{\text{th}}^2 - 1}$$

# 重力マイクロレンズ確率

- 確率はレンズ天体の平均質量密度に比例

$$\int_0^\infty dM M \frac{dn}{dM} = \rho$$

- 質量Mには依存しない！

# 重力マイクロレンズ発生率

- 単位時間あたりにマイクロレンズが発生する確率

$$\Gamma_{\text{ml}}(z_s; > \mu_{\text{th}}) = \int_0^{z_s} dz_1 \frac{d^2V}{dz_1 d\Omega} \int_0^\infty dM \frac{dn}{dM} \frac{d\sigma_{\text{ml}}}{dt}$$

$$\frac{d\sigma_{\text{ml}}}{dt} = \frac{2\theta_{\text{Ein}}^2 y_{0, \text{max}}}{t_{\text{Ein}}}$$

→  $\Gamma_{\text{ml}} \sim \frac{P_{\text{ml}}}{t_{\text{Ein}}}$  であり、 $t_{\text{Ein}}$ を通じてレンズ質量Mに依存する